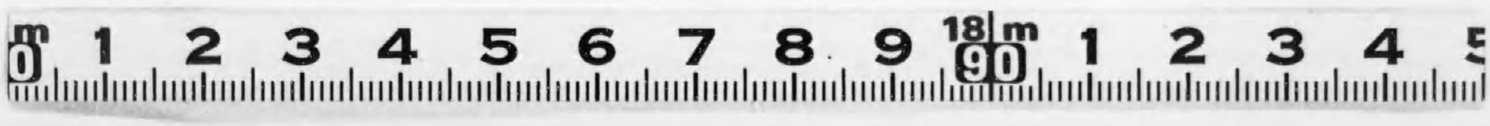
設



30

504-172

釋迦の生涯と思想

大正
12. 4. 26
寄贈

小林鶯里

文藝社出版

序

東洋思想の唯一代表根基として、四萬四千の法門と、八千餘卷の經典を有する佛教の開祖、思想界の第一人者たる佛陀の全生涯と其の偉大なる思想を努めて平易に叙したのである。

現時、殺伐なる武力闘爭は漸く去り、正義人道の平和的解決を希望するの聲は國らずも洋の東西を論せず、全人類の心胸を燃え立たしめた。こゝに當然精神文化の完成が高潮され、全世界人同一樂の宗教的信念が湧然として起り來つた。なれども、單に精神文化、宗教的信念と云ふも、餘りに漠然たる

わ社寄贈本

を見れぬ。直に其の核心を指呼し、宣説し、體得せしめ、以て恒久平等なる大眞理を基礎とし、要素とする平和境を出現せしめねばならぬ。即ち其の第一歩として此偉人の生涯を紹介し、思想問題のやかましき現時の緩和策たらしめたのである。

小林鷲里

釋迦の生涯と思想

小林鷲里

天上天下唯我獨尊

と、母の胎内を三年目に出るや、三足進んで、又た三足退ぞき、左の指を以て天を指し、右の指を以つて地を指して其の形態を現はされたのは、此の釋迦如來其の人である。

西洋人が、宗教家としてキリストを知るごとく、東洋人にして、宗教家の偉人釋迦を知らないものはない、けれど其の名を知つて其の事歴を知る人が少ない。釋迦の事歴は、なか〳〵面白く、且つ讀んで利益になることが多いのである。

印度のマカダと云ふ所は、今のカムチヤツカ邊りの一の都であつたが、此の都にカ

ビラ城と云ふのがある、此の土地の開祖たる大劍賢王から、三十六代の帝を師子頰王といつた。

師子頰王に、淨飯、甘露、白飯、解飯といふ四人の太子があつた。師子頰王は七寶を長子淨飯太子に讓つた、即ち我が國の三種の神器をお讓りになるのと同じことで、淨飯太子が帝王の位に即れたのである。

淨飯太子は、性質が温和であつたので、人民は此の御即位を祝し、三十日の間國樂を唱へ、家々酒を汲んで、非常の賑はひであつた。

帝室の即位式も、なか〳〵盛大を極め官民ともに萬歳を唱へた。此の事が濟むと、宮内大臣は、帝の前に出でゝ、

「畏れながら申し上げます」

「なんぢや」

「民の母たる皇后をお定めに相成りますやう願ひ上げます」

「余は女を好まぬぞ」

「たとひお好みなさらずとも、御世嗣なくては、王統を傳へさせらるゝ事も出來ませぬ」

「今から其んな心配は要ぬぞ」

と云つて、淨飯王は宮内大臣の勸を肯なかつた。大臣はいろ〳〵とお勸をしたが、何うしても之を取り上げない。

宮内大臣は、其の後も屢々皇后冊立のことを言上したが、王は其の度毎に之を退けた。けれど國王として皇后なきは、其の國の亂るゝ基である、といふので大臣は他の大臣等〳〵協議して、共に俱に王を說きつけた。

王は大臣等の乞ひを何時までも肯ないのは、却つて宜くないと思ひ、遂に即位の翌年に、皇后冊立のことを許された。

ソコで大臣は、吉日を撰び、百官に命じて十六歳以下の娘あるものは、悉く召し連

て、參内させた。

いよ〳〵當日になると、澤山の娘が宮中に集まつた。宮内大臣は其の集まれる内より粹を拔いて、三十人ばかりを王の前に導びいた、が一人として王の目に止るものはなかつた。

大臣は、大いに心配し、苦慮して居る内に、其の頃美人の譽れ高き、學務大臣の娘等が來て居ないのに氣がついた。宮内大臣は學務大臣の側に至り、

「貴殿の令嬢は如何なされた」

「彼等ごときものが、皇后の御位を汚すことは出來ません」

「以ての外の事でござる、今や澤山のもの等が目通りしましたが、一人として御氣に召したものは御座らぬ、是非とも美人の評判高き、貴殿の御令嬢を御連れにならねば可けませぬ」

「此の儀は、平にお斷り申す」

「ナゼで御座る。國母となることを望まれませぬか」

「如何にも」

「それは又た如何なる理由でござる、人々競ふて其の娘を皇后たらしめんとして、綺羅を飾り紅黒を粧ほひ、今日を晴と參内する内に、ナゼ貴殿のみは其令嬢の幸福を祈られざるや」

「されば、親として其の子の榮達を願はないものは御座らぬ、けれど我が娘にして、幸ひに陛下の御目に止り、國母たる御位を穢すことあらんには、彼は其の娘の爲めに榮華を極めるとか或ひは我儘の振舞をなすとか、とり〴〵の風評を受けて、遂に我が任務を行ふ上に於いて、支障を來す場合あるかも知れないと思つての故でござる」

「學識高き貴殿の思召、實に感服の外は御座らぬ、が若し我が君にして其の后なき事とならば、遂に王統を斷ねばならぬ事となり、我れ〳〵大臣として此れを捨て置くことは出來ますまい。殊に貴殿の令嬢が皇后の御位に上られたとて、貴殿のことを兎や

角申すものがござらうか、一時も早く御伴下されい」

と勸められ、百方謝はつたけれど、宮内大臣は其れを聞き入れないので、遂に學務大臣は、其の娘驕曇彌、摩耶の二人を伴なつて來た。

此の二人のものを王の目通りに連れ行くと、王は嬉しさうな笑ひを洩らして、其の儘席を立れた。宮内大臣は王の後を追ひ、

「畏れながら申し上げます」

「なんぢや」

「たゞ今の二人の娘、御氣に召しまして御座いまするか」

「那れは姉妹か」

「左樣でございます」

「眞實瓜二ッであるのう」

「ハッ」

「誰の娘か」

「學務大臣の娘で御座います」

「彼の娘とあらば、學識行狀共に充分に行屆き居るであらう」

「其れらの點には毫も疎かはござりませぬ、國母と尊めらるゝものは彼の女かと存じます」

「其の方も然思ふか」

「ハイ」

「予も彼の女ならば、皇后に上せて宜らうと思ふ、二人のものを宮中に留め置けよ」

「畏まりました」

ソコで二人は妃となつて宮中に上つた。未だ何れとも皇后の宣下はなかつた。姉の驕曇彌は馬將軍と云ふのがお附になつて、月形殿にお移りになり、妹の摩耶は青龍殿に移り、右將軍と云ふのがお附になつた。

姉を月の方と稱し、妹を花の方と稱して、二人の出世は人々の羨やむ所であつた。所が、王は花の方がお氣に召し、此のお方の方へ、重に足をお運びになつた。斯うなると月の方は、密かに嫉妬の焔を燃すやうになつた。

花の方は、或る夜の夢に、紫の雲がたなびき渡り、諸々の諸佛が合唱して經文を唱へて居ると、正面の厨子の戸は左右に開かれ、其の内より光明輝きたる一人の尊き佛が現はれ、「我れ衆生濟度のために、暫らく汝の胎内を借る」と云はるゝと共に、目が覺め身體は汗でビッショリとなつた。

花の方は、此の夢を見ると、間もなく懷妊されたので、淨飯王の悦びは固より人民の下々に至るまで、萬歳を唱へて祝し奉つゝたが、獨り月の方は、胸の焔をますゝ燻んに燃された。

お側に附きたる馬將軍、月の方の心を斯と察し、或る時御前に人なきを幸ひ、聲を密めて、

「我が君樣」

「何である」

「花の方さまには、若君御懷妊遊ばされたやうに承はりました」

「其の事は聞き及んで居るが、若しも此れが男の子ならば、彼れは皇后の御位に上るであらう、羨ましいことであるぞ」

「如何にも殘念に存じまする、つきましては、花の方樣には誠に御氣の毒に存じまするが、我が君のお爲めを思ひますれば、胎内の王子を無きものにするより外は御座りませぬ」

「そんなことが」

「此の儀、私の身體は八ッ裂の苦しみを受くるとも、必らず思ひを達したう存じます る」

「誠、其の事が叶ふなら、其れに越したる事はなけれど、如何にして王子を失なひ奉

まつる心ぢや」

「申し上げまするも恐れ入つたことでは御座りますが、此の都より丑寅の方に當りシクダ山と申す山が御座います、其の山に遁世いたし居る、二人の行者が御座います、此の行者は奇法祕術を行ふことを聞き及んで居ります」

「なるほど」

馬將軍は、二人の行者に頼み、其の祕法により、花の方母子を失なはんことを勸めた。此の時代には斯んなことが行はれて居たので、調伏さへすれば人を生死せしめらるゝものだと思つて居た。

月の方は、早速これを承諾せられ、馬將軍は密かに、其の二人の行者を、シクダ山に訪ねた。

「花の方母子調伏の儀を頼みたいのである、モシ事成就すれば、褒美はお望みに任せる、何うか祈りをあげて貰ひたうござる」

「如何にも承知いたした、が我等は未だ花の方を拜んだことがござらぬ。一たび其のお姿を拜まなければ調伏することは出來ません」

「一度お姿を見らるれば宜いのでござるか」

「さやう、お姿を拜することが出來れば、母子の生命は我等の掌の中に移つて了ひます」

「然らば、立ち歸つて、其の手筈を濟し、更ためてお伺ひいたしませう」

「委細承知いたした」

といふので、馬將軍は二人の許を辭し歸り、斯と月の方に告げた。月の方は夫は易きことである、と手紙を認めて花の方へ使を遣れた。

花の方は、御懐姙以來御氣分勝れず、常に御病床に親まれて居た。或日少し快方になられたので、庭園を散歩せられて居た。スルと月の方よりのお使といふので、何事ならんと使者を召さるゝと、使のものは一通の手紙を殘して歸つた。

花の方は、手紙を披ひて御覽になると、月の方は花の方が、懷姙以來の不快を心痛され、之れを慰さめんが爲めに、音樂會を催ほすから、氣保養かたゞ〳〵出向いて呉れと云ふのであつた。

花の方は、

「平生は兎もあれ、姉上が我が身の病氣を斯までに御心配下さる、早速月形殿に至り御禮申さう」

と云つた。

多くのお附のもの等は、

「仰せの通り、有がたき月の方様の御思召し、月形殿にお成り遊ばされ、お氣を晴さなば、御病氣も早やく快方に向ひませう」

といつて、ともに〳〵月の方の厚意を悅んだ。

所が、花の方には、忠義無二の優陀夷といふ家來があつた。此の優陀夷は、何時に

なき月の方よりの玉章、疑ひ申しては濟ぬことながら、此れには何か仔細がなくてはならぬと思つたので坐を進め、

「畏れながら申し上げます」

「何であるのう」

「月の方さまよりのお招き、おん姉上様の事にましませば、別にお心をお置なさる事なきは道理と存じます、けれど何時になきおん玉章、此の裏には何か珍事が含まれては居ないかと存ぜられます、月形殿お成りの儀は、御見合せあらせらるゝやう願ひ上げます」

「おん姉上のことである、左様の心配は無益であるぞ」

「是非〳〵お成りに相成りますれば、一應大王陛下のお許しをお受け下さるやうに願ひ奉つります」

「尤ともである、然らば陛下にお伺ひ致さん」

と云ふので、花の方は平素優陀夷の忠義を見込んで居られるので、其の乞ひに從ひ此のことを陛下にお尋ねになつた。

月の方は、花の方を調伏せんがために、其の姿を二人の行者に見せんとして、招きの玉章を送られたのである。流石は思慮深き優陀夷である。早速大王陛下の許下を受けることを、お勸めしたのである。

が、淨飯王は、月の方に斯る企てあることは知らない、姉妹が永く逢ないので、嘸逢ひたいことであらう、逢つて氣を散じれば、或は花の方の不快も常の身體に復するかも知れない、と思はれたので、

「苦しうない、月形殿に往き、一日の保養をするが宜らう」

と、花の方の乞ひを許された。

ソコで、いよ〳〵日取を定めて、此の事を月の方に知らせた。

月の方は、此の報知を得て大いに喜び、早速此の事を二人の行者に知らせた。二人

の行者は、山を出でゝ月形殿に來り、一室の内に隱れて、花の方のお越しを待つて居た。

花の方は、斯る惡魔の前に導びかるゝとは知らない、朝早く青龍殿を出でゝ、月形殿へ成らせられた、優陀夷は心配しながらもお伴をした。

月形殿へ着くと、月の方は門際まで出迎へ、わざと悅びの顏を裝ほひ、手を取つて花の方を導びき、山海の珍味を盡して饗應し、各地の名手をして樂を奏せしめ、何暮となく花の方を慰さめられるので、花の方はいと興あることに思召され、其の日は全たく病苦を忘れて、姉妹話しに時を移し、其の夜遲く青龍殿に歸られた。

花の方は、一日の保養に氣分大いに勝れ、月の方の厚意を此の上もなく、深く喜ばれた。

月の方は、花の方が歸られると、二人の行者を近く呼び、

「其の方達は、よく妹の姿を拜まれたか」

「ハイ、御肖像は、スッカリ寫し取りました」
「然らば早く祈りをあげよ」
「畏まりました、最早や花の方は勿論胎内の御尊體までも日を期して亡きものに致しまする」
二人の行者は、早速寫したる肖像に五本の釘をうち、地の下七尺深く堀り、九尺四方の調伏壇をつしらへ、供物をそなへて嚴然として呪文を唱へ始めた。
暫らくすると、二人の行者は、眼を瞑らし頭の髪を逆立て、横になり竪になり、或ひは起上がり或ひは坐り、一心不亂に祈つて居た。行者は、
「世の中に、ありとあらゆる百鬼惡魔よ、我が自由自在の通力に從がひ、今祈る所の女と、其の胎内にある小供とを亡ぼせよ」
と叫んだ。
スルと、一陳の怪風起り、座敷内なる戸、障子までが、ガタ〳〵と音して打ち震ふ

騒ぎとなつた。
月の方は、
「アレッ」
と叫んで、其の場に倒れ、しばしは人心を失つて了つた。
馬將軍は、
「我が君、斯ばかりの事に驚かれ玉はるやうでは、なか〳〵に人を呪ふこと叶ひ難し、お心確かに持せられよ」
と月の方の耳に口を寄せて、大聲に呼ばはつた。此の聲に勵まされ、月の方は漸やく人心がついた。
行者は、壇を下り、
「先づ今日は此れにて祈りを止め、また明日伺ひます」
と云つて、種々の御手當を貰ひ、其の日は御殿を下つた。

月の方は効驗の著じるしきに驚かれ、

「馬將軍よ」

「ハイ」

「行者の祈りは怖いものであるのう」

「此れより日々七日の間は祈りをあげまする、日増に怖さが増しますが、お恐弱くては叶ひません」

「其の方の云ふ通りである、此れよりは一生懸命に勇氣づけてをらう」

「併しお喜び遊ばせ、那の行者の通力ならば、美事花の方を亡くすることが出來まする」

「なるほど不思議なる、怪しき怖き通力であるのう、あれなれば屹度妹を取り殺すことが出來るであらう、嬉しく思ふぞ」

斯て七日の間、二人の行者は、一心不亂に祈りをあげた。効驗は日を追うて著るし

く見えた。いよ〳〵七日目の祈りが濟むと、行者は、

「いよ〳〵祈りは相濟みました、未だ花の方には何の障りはありませんが、七日の後には、必らず花の方は苦痛を覺えられ、それより七日を經過すれば、胎兒とゝもに花の方は此の世を去られます、お喜びあれ」

といつて行者は別れを告げ、庭に下るや否、天地をも覆へさずんば止ざる勢ひで、怪風吹き來ると共に、御殿は崩れんばかりに震動した。

俄かの怪風、大地震に、皆な〳〵其所に立ちすくんで了つた。二人の行者も其處に立ち縮み、顏色を變へてブル〳〵と慄へて居つた。

馬將軍は、劍を拔き放ち、

「不思議なる怪風である、何人が爲せし所業であるか、行者ども汝の通力を以て、此の怪風を鎭めよ」

と呼はつた。

行者は、

「ハッ」

と答へて庭先に飛び出した。

スルと不思議なるかな、二人の行者は倒さまになり、二ツに割たる大地の中に引き込まれて了つた。行者の姿が見えずなると、怪風は忽まちに止み、崩れたと思つた御殿は舊の如くで何の事もない。たゞ不思議なるは、二人の行者が其の後姿を見せなかつたことである。

後に至り二人の行者は、尊とき佛と、此れを宿せる摩耶とを呪ひ殺さんとして斯る罰を受けたものであるとは、人々の口に膾炙せられるやうになつた。

月の方は、行者に祈らせたので、指折り數へて、七日の日の經つを待つて居た。七日は過ぎ十四日も經過したが、花の方には何の障りもなかつた。

斯て一月經ち、二月經つたが、花の方は何の苦しみもなかつた。が其の後十月を經

過したが、花の方は未だ産氣がつかないので、大王始め皆な〳〵非常に心配をした。

醫師をして診察せしむるも、醫師は姙娠に間違ひない、といふけれど一年を送り二年を經ても未だ胎兒は産れなかつた。

人々心配の内に、三年の月日が經つた。斯て花の方は長の間の苦しみを重ね、其の年の四月八日の明け方になると、花の方は氣色が違つて來た。

お側に仕へたもの等は、優陀夷夫婦を始め、人々は右に走り左に往く大騒ぎをしたいよ〳〵お産の氣に相違なしと、醫師を招くと果して御誕生といふのである。

花の方は、

「ア、、苦しい〳〵」

と仰せになると、不思議のことには、空中より金色燦爛たる佛が現はれ、甘露ふりしきりて、花の方のおん顔を沾ほした。

此れと同時に、皇太子は安々と御降誕になつた。太子は生れ落ると、三足進んで三

足退ぞいて、彼の天上天下唯我獨尊の形態を現はされたのである。

我が國の辨慶は、三年三月の間、母の胎内にあり、產れ落ると已に齒が生えて居たそして取り上げんとした婆を蹴飛ばして、自分で產湯を使つたなどゝ云ふものがある畢竟此れ等は胎内に在つて已に老生して居たとの印度式形容詞を誤まり傳へたものであらう。

單に辨慶ばかりではない、或は十八ケ月の間母の胎内にあつたとか、生れて白髮であつたとか、いろ〳〵の形容詞を使ふのが、近世までの東洋では、必らず英雄豪傑生誕に欠くべからざるものとなつたのも、此の釋迦時代の形容が其の因をなしたものらしい。

花の方は、無事に太子を產み落したが、永年の間胎兒を育つたので、其の身體は非常に疲れ、殆んど血の色は消えて了つた。

太子が生れた其の夜に、花の方なる摩耶夫人は、優陀夷を枕邊近く呼びよせて、

「永く三年の間、胎内に太子をお育て申したので、此の身の疲勞は、迚も此の世のものではあるまい、我が過ぎ去りし後は、太子の身の上、萬事賴み置くぞ」

と云つた。

優陀夷は、

「左樣なこと仰せられず、お心確かにお持ち遊ばせ、病は氣からと申します、必らず心配御無用に願ひ上げまする」

と云つて、いろ〳〵花の方を慰さめた、けれど間もなく花の方は、息使ひ激しく唇の色は紫色に變らんとするので、夜中ながらも急を淨飯王に言上した。

王は、太子を擧げた喜びの後、間もなく此の哀むべき報せに、取るものも取り敢ず伴人の用意も待たずして、青龍殿へと急がれた。

花の方を呪ひ殺さんとした月の方は、行者の祈りにより、今に花の方が此の世を去ることであらう、と思つて喜んで居た甲斐もなく、其の後幾日を經過するも、花の方

に何等の異りがないので、調伏の効なかりしを、いと殘念に思つて居た。

所へ、花の方が無事太子を安產されたと聞き嫉妬の念は亦た〳〵燃んに燃て來た。

月の方は、

「ア、、殘念である、那れほどまでに調伏した甲斐もなく、安々と王子を產み落すとは、扨ては妹は果報者である」

といつて歎いて居る所へ、馬將軍は悅び勇んで駈けつけた。

「我が君さま」

「何ぢや」

「お悅び遊ばせ」

「花の方には、無事に安產されたではないか、それは女子ならが兎に角、太子とある

に何が悅びぢや」

「それのみでは御心配なさるも御道理でございますが、御安產後花の方樣には、俄か

に御病氣重らせられ、今は餘程重體でございます」

「夫れは眞實であるか」

「聊か疑ひございません」

「其れは何よりの倖はせである、併しながら表面は表面の務め、兎に角見舞に往きませう」

「それは御尤も、成るべくお急ぎ成されませ」

月の方は、僧しとは思へ、血を別た妹である、死ぬとすれば心淋しい思ひがする。

とは云へ死んで呉れねば、我が身の出世が出來ず、嬉しいやうな哀しいやうな思ひをして、道を青龍殿へと急ぐ途中、圖らず淨飯王に出逢ひ、共に〳〵青龍殿に赴いた。

青龍殿へ往き、花の方の寢室に入ると、花の方は、たゞホロリと涙を流して月の方を伏拜み、言葉もなくして其の儘、息を引き取られた。

斯うなつては、流石慳貪邪見の月の方も、

「ア、惡いことをした、現在我が妹を、手こそ掛けざれ、手を下したも同じこと、今始めて目が覺た、許して呉れよ、妹摩耶どの」

と心の中で悔みつゝ、涙に暮れて、面も上げ得ず泣き沈んだ。

花の方の葬式は、いと懇ろに營まれた。月の方も今は眞心を以て、其の櫃を埋めたる青龍殿の北なる、花の方の墓前に讀經の勤めをされた。

月の方は、せめては妹の靈を慰めんと、王に乞ふて太子を我が子として養育することにした。優陀夷夫婦のものは、太子の傅役として月形殿に移り、朝夕太子の看護を怠らなかつた。太子は此の時悉達太子と名づけられた。

悉達太子は、生の母に別れたるも、優陀夷夫婦の丹精により、日を逐ふて生育し、其の體格も人並に勝れ、三歳にして早や五六歳のものも及ばぬ身の丈になつた。

此の時代は、世は太平とは云へ、武を練り競ふ時であつたので、優陀夷は心を籠て太子に武藝の道を敎えた。何事も人に優れた太子は、年七歳にして武藝の全般に渡つ

て通じたのである。

所が、釋迦に提婆と云つて、今日までも犬猿啻ならざる間柄を代表されて居るが、此の提婆といふ人は、淨飯王の弟斛飯王の子である。此の提婆は幼けなきときより非常に武藝を好み、或は山に登り、或は野に走り、獸物や虫類の生命を奪るのを、其の日の仕事として居るのである。

だから年は僅かに十二歳であるが、其の力量は驚くべきほどで、牛を投げ殺して人人の膽を冷からしめた、といふ一事でも其の一端を伺ふことが出來るのである。

此の提婆が、或る日家來共を集めて、武藝の練磨をして居ると、取次ぎのものが遣つて來た。

「申し上げます」

「何ぢや」

「只今、カピラ城の悉達太子から御使が參りました」

「悉達太子から使者ぢや」
「ハイ」
「何の用ぢや」
「若様にお逢ひいたしたいと申して居ります」
「よし〳〵、今武藝の練磨中だから少し待たせて置け」
「應接間でお待ち申して居りますから、お早くお會ひ下さいませ」
「直ぐに參るから、さう申して置くのぢや」
「畏まりました」
暫らくして、提婆は應接の間へ遣つて來た。
「太子様でございまするか」
「悉達太子からの使者とは、其の方であるか」
「左様でございます」

「何の用ぢや」
「餘の儀では御座いません、太子は七歳にお成遊ばされました」
「さうであるのう」
「ついては、右お祝ひとして、駒競べ、弓勝負など、お催ふしになりますが、太子様にもお相手として御光臨を願はれますまいか」
「ナニ、悉達太子が、予と勝負いたしたいと申すのか」
「左様でございます」
「なんだ、悉達太子は未だ小供ではないか」
「左様でございます、おん年は僅か七歳でございますが、優陀夷の丹精に依り、武藝は餘程御上達致され居りまする」
「いくら武藝の修業が了へたりとも、此の提婆と手合せを望むなどゝは、片腹痛い、が望みとあらば仕方がない相手に成つて遣はさう」

「早速の御承知、使者の冥加、此の上もござりませぬ」
「だが、武藝は、日頃予が嗜む所である、駒競べ、弓勝負、何なりとも相手をして、悉達太子を驚かし呉れん、太子には充分の用意いたさるゝやう、よく申し傳へよ」
「ハッ、仰せの趣き、言上いたすでございませう」
「小供の癖に、生意氣なことを申す奴である、ハ、、、、」
「然らば、必らず日限間違ひなきやうに願ひ上げまする」
「如何にも承知した」
「此れにて御免を蒙ります」
「大儀であつた」
使者も、提婆太子の高慢には、少しムッとした。けれど相手は太子である、畏まつて其の儘急ぎ、カピラ城に歸つて來た。
提婆太子は、前にも云つた通り、其の父は淨飯王の弟である。淨飯王には悉達太子

が一人子で、他に太子はないのである。悉達太子さへなくば、自分は淨飯王の後を繼ぎて國王となれる身分であつた。
だから平素好んで武藝を修め、又た文事を磨き、悉達太子に劣らないやうに勵んで居たので、若し大王に萬一の事あらば、自から兵を起して、悉達太子を攻め亡ぼさんとは、常に心中に潜めて居た企みである。
斯る心掛けであるから、文武大いに進み、自分も天狗で居るのだ。且つ悉達太子は僅かに七歳、自分は十二歳であるから、自から悉達太子を侮どるのは當然である。
使者は、カピラ城に歸つて、此のことを優陀夷に告げた、優陀夷は又た悉達太子に告げて、其の日の來るのを待つて居た。
淨飯王は、悉達太子の凡人に勝れたる擧動には常から驚いて、宜き世嗣を得た、早く世を彼れに讓りたいと、引き延すやうに其の生長を樂しんで居るのであるから、今度の催ほしは、頗る興味を以て迎へられたのである。

いよ〳〵當日になると、カピラ城は人を以て埋められた。

「悉達太子は、年こそ往かざれ、提婆太子に敗れを取れるやうなことはなからう」

「提婆太子は、聞えたる武藝者である、大人だも及ばないと云ふのに、僅か七歳の悉達太子がお相手とは、トテも悉達太子に勝目はなからう」

と云つて、とり〴〵に評判をして居た。

いよ〳〵當日になると、カピラ城内に四十間四方の勝負場をこしらへ、其の四方に棧敷を設け、恰かも我が國の角力見物と異りはない。悉達太子最負のものも提婆太子最負のものも、所狹きまでに棧敷に集まつた。

時刻になると、悉達太子は東の大將として、提婆太子は西の大將として、おの〳〵三十六人の部下を從がへて出場したので、場内は割るばかりの歡聲を以て迎へた。

東から一人出で、又た西からも一人出でゝ、互ひに勝負を爭つたが、遂に東の方が勝越しになつた。

いよ〳〵三十六番の取組が濟むと、大將悉達太子と提婆太子との取組となつた。提婆は假令部下のもの等が貫星を多く取りたりとて、我れ悉達に打ち勝つて、此の恥を雪ぎ呉れんと、逸る心を押し靜め、駿馬に跨がり、小弓を取つて、西の方よりシヅシヅ立ち出でた。

提婆は、手綱をかひくり、パイヨートッ〳〵〳〵と駒を乘り廻し、場内を三週して、元の所に止まつた。

其の乘方の熟練したること、人あつて馬なきが如く、馬あつて人なきが如く、目に止らぬ早業であつたので、群がる人々は、

「お美事〳〵」

「天晴〳〵」

と囃し立てた。

棧敷に居られた淨飯王も、

「提婆は、平素武藝の高慢をするだけはある、なか〳〵鮮やかなものである、全たく口ほど出來るのだ」

と賞められた。

提婆の馬廻りが濟むと、東の方より悉達太子が、シヅ〳〵と駒を乘り出した。そして一鞭當てると、瞬く間に場内を三週して元の所に立ち止まつた。

餘りの速さに、見物人は膽を潰し、囃し立てることも出來なかつた。

「何うも驚きましたねえ」

「眞實人間業とは思はれません」

「モウ、三周されて了つたのですか、驚きましたねえ。目脂を拭く間が有りませんでした」

「此れでは、年は幼けなくとも、今日の勝負は悉達太子のものでせう」

「さうです、ア、も熟達されるものですかね」

「お馬がお上手でも、弓は又た別だから判りません」

「何して、悉達太子と云へば、一を聞いて百を知らるゝ聰明なお方、小弓だとて粗かはありません」

と云つて居る内に、いよ〳〵小弓の勝負が始まつた。

此の小弓の勝負と云ふのは、西の方から鞠を投げ、相手は小弓を取つて、其の鞠を射るので、之れを射損じなば東の方が負になる。東の方から投げる鞠を、西の方が旨く射止めれば、西の方が勝となるのである。

東の大將、悉達太子は、

「ヤッ」

と叫んで、鞠を空中に投げ上げた。投げられた鞠が將に地上に落んとするのを、

西方の大將、提婆太子は、

「エイッ」

と叫んで、小弓の矢を放つた。

提婆が放つた矢は、過またず鞠の中央を、したゝかに射抜いたので、見物は思はず聲をあげて賞讃した。

提婆は、意氣揚々として、後に退り、

「ヤッ」

と叫んで、鞠を空中高く投げ上げた。

悉達太子は、

「心得たり」

と、落ち來る鞠を狙つて、小弓の矢を放つた。

悉達太子が放つた矢は、提婆の夫れの如く、旨く鞠の眞中を射貫くであらう、と思つて居たが、案外にも其の矢は外れて、鞠は地上に落ちた。

本人の悉達太子は平氣で居たが、見物人は呆れて了つた。淨飯王も失望した。スル

と優陀夷は、

「提婆太子どの、今一勝負お願ひ致します」

と云つた。

悉達太子は、なか〳〵武術に長けて居るのである。鞠を射貫く位は何でもない、が最初より勝を取るのは、態々遠來の客に對して體を欠く、のみならず提婆に恥辱を與へて、後日何んな恨みを受けるかも知れない、一度は讓るべきものである、と思つたので、わざと射損じたのである。

太子に、こんな考へがあるとは知るものはなかつた。

見物人は、成るほど道理である、まだ若年ゆゑ幾ら發明だと云うても、弓は提婆太子には及ばない、五ッも年が違ふて居ては、負けるのは當然である、と思つて居た。

が優陀夷は、常に太子を敎導して居るのである。太子の腕前が何の位である、と云ふ事は能く知つて居る。射損ずべきものでないのを射損じたので、ハ、ア此れは勝を

譲つて、五分〳〵の勝負にせられるのだなと氣がついた。

流石は、優陀夷である、斯くと太子の心を讀んだので、提婆太子に第二の勝負を申し込んだ。スルと提婆は目に角をたて、

「何と申す、優陀夷」

「恐れ入りますが、今一勝負を願ひ上げまする」

「卑怯なことを申すな、悉達どのより投げられた鞠は、予が充分に其の眞中を射貫き予が投げたる鞠は、悉達殿これを射ること能はずして、地に落ちて了つた。斯る未熟なる腕前にて、此の提婆の相手とならんとは、片腹痛きことである。今日の勝負は西方の勝に極つて居る。更ためて勝負する必要はない」

「悉達太子様は初めより鞠を射るお考ではあらざりしことは、其の矢先に於いて、斯く申す優陀夷が認め居りまする。此れは勝負を五分〳〵にせんとの遠慮より、わざと鞠を射損じられたに相違ござらぬ。實と提婆太子様が、御腕前勝れさせらるゝものならば、幾度にても望みに任せ、いよ〳〵悉達太子様が兜を脱るゝまで御相手あつて然るべきに、彼これと云ふて勝負を嫌はるゝは、心中悉達太子様の腕前に怖れを抱かれて居らるゝものと思はれます」

「云ふな優陀夷、我れ何を以てか、那の未熟なる腕前を怖れん、勝負などゝは片腹痛し、稽古とあらば幾度にても汝の申すごとく、悉達どのが兜を脱くまで相手をせん」

「高慢なる其の一言、眞實悉達太子様の腕前に驚かるゝな」

「高の知れたる那の手の内、提婆に驚くなどゝは過言である、望みに任せて、今一勝負いたし遣はす、準備いたさせよ」

「然らば草薙の勝負を願ひます」

「草薙とは面白い、予が望む所であるが、悉達どのには、其の早業が出來るかよ」

「慢言は勝負の後にて承たまはりませう」

「よく申した、再び口の開ぬやう、提婆の腕前を見て居れよ」

と飽まで高慢なる提婆の言葉に、悉達太子は人に勝を讓つて貰つたのも知らず過言も程のあるもの、いで彼の鼻を挫ぎ呉れんと、腕を撫つて進み出た。

此の草薙の勝負といふは、前の小弓の勝負の早業で、敵より鞠を地上に轉ばし來るのを、矢つぎ早やに八ッまで射貫くのである。

悉達太子は、八ッの鞠を手に持ち、一ッづゝ投げつけた。其の速きこと電光のごとく、目にも止らなかつた。

最初悉達太子が投げつけた鞠を、二ッまでは美事に提婆が射貫いた、が三ッ目からは目にもとまらぬので、提婆は悉く射損じて了つた。八ッの内射貫たのは、僅か二ッしかなかつた。

ソコで掛りの行司は、

「提婆太子様、お當りが二ッ」

と呼び上げた。

提婆は、

「八ッの内二ッしか射貫かざりしとは殘念である、此の上は悉達には一ッも射得させずして呉れん」

と、力を込めて八ッの鞠を手にして、先づ一ッを急しく投げつけた。

悉達太子は、重ね〴〵の廣言、思ひ知らせて呉れんものと、提婆が投げつけた鞠を狙つて、

ピシヤリ！

と、意のごとく、其の中央を、美事に射貫いた。

提婆は、

「失敗たり」

と、少しの暇もなく、第二の鞠を投げつけた。

悉達太子は、

ピシャリ！

と、これ又た意のごとく其の中央を射貫いた。

提婆は、少し焦つて、二ッ、三ッ、四ッ、五ッ、六ッ、と引き續いて投げつけた。

悉達太子は、一ッも過またず、之れを射貫いて了つたので、心惡き提婆は七ッ目の鞠を、方向を違へて、自分の後へ投げつけた。

驚いたのは見物人である、鞠を投げるのは、自分より前へ敵へ向つて投げるのが法則である。然るに無法にも自分の後に投げつけたので、

「無法だ」

「卑怯だ」

「遣り直せ」

と、見物人が騒ぎ出した。

けれど、悉達太子は、斯ることも有んかと、豫てより意を注いで居たものか、ピュ

ーと放つた矢は、過またずして此の無法なる鞠をも美事にピシャリーと射貫いた。

「お美事」

「悉達さまア〳〵」

「天晴〳〵」

と見物人が賞め堪へる内に、提婆は不埒にも八ッ目の鞠を、下に投げると見せかけて、空中高く投げ上げた。又も投げられない空中へ投げたので見物人は、

「馬鹿もの」

「狂人」

「馬鹿太子」

などゝ、餘りに卑劣なる遣り方に、相手の尊ときを忘れて、口を極めて罵しつた。

悉達太子の八本目の矢は、提婆の望み通り、地上をすべつて射損じて了つた。見物人は、

「射損なふのが當然だ、那んな投げ方があるか」
「投げ直せ提婆太子」
「卑怯もの」
と、騒ぎ立つた。
提婆は、
「して遣つたり」
と悦んで居る間もなく、悉達太子は第九本目の矢つぎ早やに放つたので、今や鞠が地につかんとする瞬間において、美事に八ツ目の鞠を射貫いた。其の早業は實に目にも留らなかつた。
之れを見た見物人は、
「悉達さま」
「神さま」

と、悦び勇んで大聲をあげ、しばしの間は鳴りも止なんだ。
淨飯王は、悉達太子の技術凡人の及ぶ所にあらざるを見て、非常なる御機嫌であつた。
行司は、
「悉達太子樣、當り八ッ」
と聲をあげた時は、又も見物人は鬨の聲をあげ、天地も崩るゝばかりの騒ぎであつた。
悉達太子は、非常の面目を施こし、悠々と勝負場を下られた。
此の時、人々に百倍して悦んだのは優陀夷である。自分が育てあげたる悉達太子が世にも珍らしき早業を演じたので、勝負場に跳り上つて、
「提婆太子樣」
「……」

「尊とき御身分でありながら、何たる卑怯の投げかたを遊ばさるゝ、那れでも草薙の法でございますか、誰人にお教ひ遊ばした、いや那の位のことでは、まだ兜はお脱ぎになりますまい、いざ今一勝負成つては如何でございます、默つて居らつしては分りません、悉達太子様は幾度にても、お望みとあらば勝負致されます」

と云つた。

提婆太子は、自分の技術が、トテも悉達太子に及ばないといふことは、充分に知ることが出來た。此の上勝負をすれば、ます〳〵恥を晒すばかりである、優陀夷に再度の勝負を勸められたが、ヂッと齒を喰ひしばつて、何の答へをすることも出來なかつた。

彼是する内に、係りの役人は、

「今日は、此れにて閉場、みな〳〵御苦勞」

と閉會を告げた。

淨飯王は、御機嫌よく其の席を下られ、此れより人々を召して饗應をされたが、提婆太子は、餘りに面目を失したので、病氣と僞はり饗應の席に出ずして、コソ〳〵と逃げて了つた。

此れより提婆太子は、一層悉達太子を憎み、何とかして太子を苦しめんと、密かに時機を伺つて居た。が、悉達太子には優陀夷といふ忠義ものがついて居るので、少しの油斷もなかつた。

其の後悉達太子は、異りたることもなく、おん年九歲になられた。印度人は今日でも早成であるが、此の時代も熱帶地方だから、人間の成育は餘程早いので、九歲と云へば、我が國の十六歲にも當るのである。

或る日、淨飯王は、太子の傅役優陀夷を傍近くお呼びになり、

「如何に優陀夷、悉達も九歲になつたが、予は早く此の位を讓らうと思ふが、何うちや」

「大王陛下は、未だ御健勝に在せられますれば、今暫らく太子様に御勉強いたさせられた方が宜しからうと存じます」

「悉達は、武術に於ては、餘程人に勝れ、文事も一を聞いて百を知るので、餘程上達したと聞及んで居るが、まだ其方等の敎へを受けねばならぬか」

「太子の非凡なる御性質は、實に驚くばかりにて、最早や私共のお敎へ申すべきことも御座りませぬ、此の上は然るべき師を探し求めて、御學びなさる外は有ません」

「悉達の師となるべきものは誰であらうのう」

「博學の名高きウッランポッの外には有りますまい」

「成るほど、ウッランポッなれば、悉達の師と仰いで不足はあるまい、然らば彼を呼び寄せ、敎授いたさすがよからう」

「彼は高德博學の聞へ高きものに御座りまする」

「さうである」

「呼び寄せまするは如何かと存じまする」

「呼び寄せても來ないと云ふのか」

「大王の御命令を背くことは御座りますまい、が太子様御修業の間は、身に絹布を纏はせられず、粗服を着せられて、朝は早く夜は遲く、修學の間にも民の疾苦を辨まへらるゝやうに致しなば、後日民の父として、非常なる御利益あることかと存じます」

「其の方の申す所、實に尤もである、辛いと云つた所で、僅かの間である、然らば其の如く計らへよ」

「畏まりました」

「悉達には、其方から宜く申し傳へるやう」

「心得ました」

「必らず我はカピラ城の太子である、と云ふ考へを持たないやうに、學問を一心に勉強いたせと申せ」

「ハッ」

優陀夷は、淨飯王の命を受けて、御殿を下つて月形殿に歸つた。そして此の事を月の方に話した。月の方も大いに喜んで、

「其の方より悉達に申し傳へよ」

と、口では云はれたが、女性のことであるから、今まで多くのものに侍かれたものが、よく獨りで勉强することが出來るであらうかと、密かに危ぶんで居つた。

優陀夷は、月の方の前を辭して太子の室に往つた。太子は机に向つて、一心に書見最中であつた、優陀夷は太子の前に手をつき、

「太子樣」

「何ぢや」

「畏れながら、優陀夷命を受けて、太子を御敎育致し居りましたが、最早や太子の學業は大いに進み、此の上は優陀夷ごときが、お敎へ申すことは出來ません、よつて此

れより博學の名高き、ウッランポッを師と仰ぎ、一層の御勉强あらせられん事を願ひ上げます」

悉達太子も、優陀夷が云ふまでもなく、自分も誰か博學の師を求めて、廣く學問をしたいと思つて居たのである。此の時に於いて、優陀夷の言葉を聞いたので、大いに喜び、

「優陀夷」

「ハッ」

「ウッランポッを師と仰げとは、予も望む所である、寸時も早く其のことを取り計らへよ」

「つきましては、お父上陛下にも伺ひましたが、カビラ城の太子であるとのお心を捨てゝ、下々のごとく粗服に身を纏ひ、下民の疾苦を嘗めさせられ、苦學の修業を遊ばされんことを、畏れながら願ひあげまする」

「さやうか」

「下民の狀態を知悉せらるゝは、後日大王に代らせられる時、非常なる利益を太子樣に持ち來すものと存じます」

「如何にも其の方の申す通りである、然らば左樣に計らへよ」

「心得まして御座ります」

「父上も母上も、已に御承諾になつたか」

「ハイ」

「然らば、直ちに出掛けるやうに致せよ、予は父上母上に、お暇乞ひを致し來るぞ」

「今日と申しましては、最早や時刻も遲く、明日御出立遊ばされたが宜しう御座りませう」

「何と申す優陀夷」

「ハッ」

「其方は、常に學問は寸時も忽がせに出來ないと申し居るではないか、然るに今日に限り、明日に延せとは、何か理由があるか」

「畏れ入りました、優陀夷の心得違ひで御座いました、早速御準備いたしませう」

「さうであらう」

といつて太子は宮中に往き、父君淨飯王に暇乞ひをなし、月の方にも挨拶を濟せ優陀夷を伴につれ、ウッランボッが住い居る寺院を指して急がれた。

優陀夷は、ウッランボッに面會して、太子の身の上を賴み、太子を殘して其の儘歸つて了つた。ウッランボッは太子の敎育を托せられたので、頗ぶる之れを名譽とし、全力を太子の智德發育に注いだのである。

一を聞いて百を知る悉達太子は、ウッランボッを師として、日々學事に勉勵したので、其の成蹟は頗る見るべきものがあつた。尤も此のウッランボッの寺院には、太子一人ではない、各地方からウッランボッの博學を慕ひ、敎を寺內に受るものが多かつ

た、が悉達太子のごとく、學業の進歩著じるしかつたものは、幾百人の門弟中一人もなかつたのである。

所が、此の悉達太子の身に附纏ひて、常に太子を陷し入れ、自分がカピラ城主たらんとの大望を抱き居る、彼の提婆太子は、悉太達子がウッランポッの寺院に移つたと聞き、手を打つて大いに悅んだ。

提婆は、今こそ我が望みを達する時である、と喜び勇んで、北山と云ふ所に住んで居る漢孫呂を訪ねた。

「漢孫呂」

「ハイ」

「其の方に折り入つて頼みたき義がある、何と聞いては呉れまいか、事成就すれば、其方を一國の主となし遣はすであらう」

「此れは有り難き仰せを蒙ります、たとへ御褒美下されずとも、太子の仰せ如何で之

れを背きませう」

「それ聞てい安神いたした」

「何事でござりまするか、お聞せ下さるやう」

「外ではないが、從兄弟の悉達太子である」

「ハイ」

「彼れさへなくば、カピラ城主となるのは予の外にはないのだ」

「さやうで御座ります」

「所が、彼れ悉達は幸ひにもウッランポッの寺院に來り、學事修業をして居ることを聞いたのだ」

「でござりますか」

「ソコで、其の方に頼みと云ふのは其の方もウッランポッの許に至り、學事修業と見せかけて、彼れ悉達を誘ひ出し、婬酒をすゝめ、學事を怠たらしめ、王位に卽せない

やうに仕たいと思ふのだ、其方に出來ない仕事とは思へないが、何うだ一つ骨を折つては呉れまいか」

「其の位の事は何でもござりませぬ、私が引き受けて、美事悉達太子を婬酒に耽らせませう」

「早速引き受けて呉れて、此の上の悦びはない、何分にも賴み置く、就いては其れに要する費用は、申し越し次第貢いで遣はす」

「承知仕つりました」

「それでは一時も早く」

「心得ました」

と云ふので、提婆太子は漢孫呂に何呉となく賴み置いて、其の許を辭するや否漢孫呂は直ちに仕度をして、ウッランポッの寺院に到り、學事修行に托して寺内に止まることになつた。

或る日、漢孫呂は、悉達太子の室に往つた。太子は机に向つて、餘念なく讀書して居た。

「太子様」

「なんぢや」

「太子様は、カビラ城主に成せられるお方でございませう」

「さうだ」

「貴方様が、カビラ城主に成らせられたら、私を何かの役に取り立てゝ下さりませんか」

「なるほど、其方は常に予に親切にして呉れる、予がカビラ城主となつたら、其方には褒美を遣はさう」

「有り難う存じます、時に太子様が此の寺院にお越しに成つて居るのは、學問を成さるのが目的でせうが、又た下民の事狀を御研究になるのが主でございませう」

「さうだ」

「然るに此の寺院にばかり閉ぢ籠つて居られては、下民の狀態を察することは出來ますまい」

「何うすれば人民の事情を詳らかに知ることが出來ると云ふのか」

「これより北に田庄といふ所があります、私などは時々遊びに參りましたが、其所には生きた佛もあり、百藥の長もあり、いと憐れなるものもあり、又た豪奢を極め居るものもあり、いろ〳〵樣々のもの等が寄り集まつて居ります。民情を察するに此の地より宜き所はありません、太子が若し御出まし成されますれば、私がお伴を致します」

「左樣であるか、お師匠樣は、ナゼ其の地あることを敎えられないのか」

「お師匠樣は敎へられませぬ」

「ナゼか一」

「なぜと申して、足一たび此の巷に到るときは、遂には學事も廢するやうに成ります

故に敎へられません」

「然らば御師匠樣に願ひ、一たび其の地に赴くであらう」

「此のこと御師匠樣は固より、他の弟子達の耳にも入れることは出來ませぬ、御越しになりますなれば、私が人知れず御案內致します、此の世の極樂でございます」

「然らば此れより參らうか」

「今と申しては人目繁し、もし人に知れたる節は、私は非常に迷惑いたします、今宵お師匠樣が寂靜まつた後、ソッと私の部屋までお越しあれ、必らず御案內仕まつります」

「夫れは千萬忝じけない、然らば今夜間違ひなく、お前の部屋まで往くほどに、此の世の極樂に導びき給へ」

「委細承知仕つりました」

といふて二人は堅く約束を定め、漢孫呂は自分の部屋へ歸つた。

悉達太子は、此の世の極樂とは如何なる所であらうか、早く生た佛に逢ひたいものである、と自ら邪道に行き入れらるゝとは知らず、其の夜師匠ウッランボッが寐入りし頃を計り、他の弟子達が打ち臥したる所を見て、密かに漢孫呂の部屋へ往つた。

漢孫呂は、今や太子が來るかと、身仕度して待つて居たので、二人は寺院の裏戸を押し明けて、田庄といへる傾城町を指して急いだ。

悉達太子と漢孫呂の二人は、寺院を忍び出でゝ道を急ぎ、遊女町なる田庄へ着たのが夜の十一時頃であつた。軒を列べてさゝめき渡る糸竹の聲、何となく氣も心も浮き立つて來た。

二人は、那方此方と眺めつゝある內に、向ふより最と綺羅美やかなる裝飾にてソロソロと蓮歩を運んで來るのが、其當時此の廓第一の全盛と云はれたハスミッタである

「太子樣」

「なんちや」

「那れを御覽遊ばせ」

「フム」

「那れこそ、今名高き生きた佛のハスミッタさまで御座る」

「ナニ、那の女が生き佛か」

「太子樣のお目には美くしく見えませぬか」

「如何にも美人である」

「あの佛の傍に往きたらんものは、如何にも只有り難くて、生佛の利益明暮忘れ難く誠に此の世からなる極樂でござります」

「さうであるか」

「生佛ハスミッタのお傍へ御案內致しませうか」

「予は少しの金も持たぬぞ」

「其の御心は要りませぬ」

といつて漢孫呂は先に立つて、太子を兎ある大きな料亭に導びいた。

漢孫呂は、

「カビラ城の悉達太子であらせらるゝぞ、みな〳〵疎忽なきやう注意せよ」

と二人を取り卷く多くの仲居等に耳打ちしたので、女どもは有ん限りの眞心籠めていと丁寧に太子に侍づいた。

暫らく經つ間に、ハスミッタは多くの小者に侍かれ、しづ〳〵と蓮歩を運んで太子の傍に坐つた。ハスミッタの美しさ物に譬へん樣もなく、實に人であるとは思へなかつた。

太子は勸めらるゝ酒に、氣も心も浮いて來た。ハスミッタの情あるもてなしに始めて人の愛を悟り、其の傍を離れがたなくなつた。

斯る時には、長かるべき時間も最と短かく、早や夜明け近くなつたので、漢孫呂は太子を促がして、人の知らぬ間にウッランボッの寺院に立ち歸つた。そして翌晩も又

た其の翌晩も、漢孫呂は太子を誘なひ、ハスミッタの許に通ひ、遂に太子を婬酒の淵に沈めた。

太子は、ハスミッタの眞心籠たる愛情は、少しの暇も忘れることは出來なくなつた夜は夢に晝は幻に、たゝハスミッタの事ばかりを思ひつめ、讀書の道は忽がせになつた。

太子は遂に婬酒の淵に沈んだ、ウッランボッは早くも之れを察し、恐懼措く所を知らず、使を走らせて優陀夷を呼んだのである。

優陀夷は、其の日他に止み難き用事があつたので其妻をして己に代り、ウッランボッの寺院に往かしめた。妻は女人禁制の寺院である、白晝公然往くことも出來ないので、日の暮るゝを待つてウッランボッの寺院に往つた。

「ウッランボッ樣、本日は御使者をつかはせられ、夫優陀夷止みがたき用務のため、女人の身を顧みず、妾が代つて參じました、悪からず御許し下さいまするやう」

「これは、御多用の所をお呼び申し、お氣の毒に存ずる」
「して御用の趣きは何で御座りまする、仰せ聞けられませう」
「されば其の事は書面にてと思ひしが、太子の將來を思つて、わざと書面は認めなかつた」
「ハイ、太子樣には、無事御勉強で御座いませうか」
「恐れ多きことながら、太子樣御養育を仰せ付けられ、身に餘る面目と、晝夜身命を忘れて、御敎育いたした甲斐もなく、于茲一ッの障りが起りました」
「障りと仰せられまするは、若しも太子樣には、御病氣にても在せらるゝか、して太子樣は何れに居らせらるゝので御座ります、斯く申す間も心許なし、早く太子樣のお室へ御案內下されまし」
ウッランボッは、兩眼を閉ぢて、優陀夷の妻の言葉を聞いて居たが、暫らくして眼を開き、

「遲るは尤もなれど、病氣ではない御安意あれ」
「病氣でなくて、障りとは何でござりまする」
「太子は近頃身を持ち崩された」
「エ、ッ」
「身を婬酒の淵に沈め、學問の途は忽がせになり、幾度意見しても皆な馬耳東風」
「……」
「時には善男善女が喜捨したる賽錢を盜み出し、其の金を以つて田庄の遊女町で、酒の香を嗅いでは、百藥の長と悅こび」
「ヤア太子樣が！」
「夫れのみならず、那の本堂に祀り奉つるは、我が國に二ッとなき寶である、其の佛像を盜み出し、金に代へて賤しきハスミッタが一夜の情を買んとし、生たる佛の傍に往くとて我が非行を顧みられない」

「始めて聞きましたウッランボッ様、太子様には如何なる惡魔が魅いりて、斯くまで墮落なされたので御座りませう。今日まで丹精を盡して、お育て申した甲斐もなく、神童よ發明よと呼ばれ玉ひし太子様が、今は盜人よ、人でなしよと、呼れるやうに成れたので御座いませう」

「今となりては歎くも詮なし、此の上は一日も早く太子を宮中に引き取り、足止めせらるゝ外は御座るまい、此のこと申したさに使者をあげたのである」

「して太子様は、何れにお在ましするぞ、叶はぬまでも御諫言申しあげ、心を入れ換へ下さらずば、妾とておん父君淨飯王陛下に會す顏がござりませぬ」

「尤もである、今は太子は在しまさぬ、程なく歸らるゝであらう、暫らく太子の歸りを待たれよ」

「太子様は、今夜も廓へお通ひ成されましたか」

「たゞの一夜も欠されたことは御座らぬ」

優陀夷の妻は、聞けば聞くほど、胸塞がりて、今は言葉さへも出でず、たゞ涙に暮れて居た。此の上は此所に一夜を明すとも、太子の歸りを待つて、身を殺して諫言せんものと、ウッランボッに乞ふて、一室を借り、寐もやらずして、太子の歸りを待つて居た。

優陀夷は、其の妻の歸りの、餘りに遲きに、若しや太子の身の上に、異りしことの起りはせずやと、心配に堪へられないので、夜中を犯してウッランボッの寺院を訪ねた。

「我が夫さま」

「何事である、餘りに遲きゆゑ、若しや太子様のお身の上、案じられて堪られず、夜中ながらも來て見たのぢや、して太子様には如何遊ばされたぞ」

「されば、太子様のお身の上には、容易ならざることが起りました」

「容易ならざることが……那の太子様のお身の上に、早く聞して呉れよ、どう成され

たのぢや」

「云々斯様〳〵」

「娼酒の巷へ足を運ばれると、全たくであるか」

「お疑がひも尤もなるも、今夜も其の巷へお通ひなされ、今は此の寺院には居られませぬ」

「ソは聞き捨てにならざる一大事である、茫乎とお待ち申す場合でない、我れは此れより田庄に向ひ、太子様の居所を探さん」

「逸り玉ふな我が夫、田庄とても五軒十軒の遊女屋ならず、悉く探さば夜明くるとも探されまじ、最う程なく太子様もお歸り遊ばされませう、暫しの間お待ちあれよ」

「否とよ、一分時たりとも猶豫する場合でない」

と優陀夷は妻の止むるを肯ずして、田庄さして駈け出した。

優陀夷の妻は、たゞ獨り一室に坐して太子の歸りを、今や遲しと待つて居た、暫らくすると足音を忍ばせ、雨戸を一枚明けたものがあつた。

優陀夷の妻は、それのみを待つて居るのである、深々たる眞夜中、人の足音に息を殺して考へて居ると、太子は二人連れで歸つて來た。

「太子様」

と案外にも暗夜を破つて響いたので、太子等は驚き一足後へ下ると、優陀夷の妻は其の姿を現はした。連れなる漢孫呂は、急ぎ自分の室へ逃げ込んだ。

「太子様」

「誰かと思へば優陀夷の妻か」

「さやうで御座りまする」

「何用あつて、此の眞夜中に訪ね來りしぞ」

「妾よりも太子様には、此の眞夜中に何れへ赴かせられ、何れよりお歸り遊ばされました」

「予か」
「ハイ」
「予は、退屈の餘り、所々方々と歩き廻る内、計らず遲くなり、今歸つて來たのぢや」
「して何れへお出遊ばされましたか」
「……」
「お師匠樣のお許しを受けてお出ましなさりましたか」
「……」
「行くべき所でない場所へ、お出遊ばしたので御座いませぬか、太子樣には娼酒の巷にお通ひなされ、尊とき御身を淵川に沈められたと聞き、僞はりであらう、僞はりであつて呉れよと、今まで太子樣をお待ち申して居りました。御返事なきは太子樣の御振舞、定めて世にも淺ましき行爲を、毎夜〳〵遊ばさるゝからで御座いませう」
「……」

「サア、此の上は太子樣を手放して置くことは出來ません、此れより直ぐに宮中にお連れ申し、元の太子樣にせなければ、妾夫婦が今日まで、丹精いたした甲斐がありません、とは云へ此のことを、お父君に申し上げなば如何に逆鱗ましませう、おん母君樣は、如何にお歎き遊ばされませう」
「過まつた、迷つた、許して呉れよ、二度と再び娼酒の巷に足は入れぬぞ、予が惡かつた」
「惡いとお心づき下されば此の上は御座いません、お父君、おん母君への御申し譯は妾が生命を捨てゝ致します、何卒妾が亡き後に、可哀相だと思召すお心がありましたなら、千萬人の讀經よりも、太子樣のお心が元に還るを悅びます、必らず元の悉達太子にお成り遊ばして下さいませ」
と云ふより早く、用意の懷劍は、已に其の首に近づいた。
太子は、早くも其の手に絶り、

「死を急いで過まちするな」
「太子様、其所お放し下されませ、時經れば優陀夷が歸ります、歸られては妾の忠義も水の泡、早く死なして下さりませ」
「ならぬ」
「放して」
と驚ぎ居る内、一室の内よりウッランボッは駈け來り、
「速まるまいぞ、死して何の忠義が出來やう」
と、手にせる懐劍をもぎ取つた。
「優陀夷の妻とやら、斯も迷はれた太子の身の上、お前の手でなくて、誰が之れを善道に導びかう、今死ぬるは忠に似て忠でなし、此のこと解らぬ御身でもあるまい、逃まり給ふな此れ女、太子のおん身は此の先が大事であるぞ」
「御尤もで御座ります、夫れでは死ぬ事も叶ひませんか」

「太子様」
「お師匠様、誠に申し譯が御座いません」
「今更申し譯ないとて返らぬことで御座る、此の上は早々宮中へお歸りなされ」
「私は罪深き身を以て、父君母君に合す顔がございません、責て此の罪を亡ぼすまでお師匠様のお傍に置いて下さりませ」
「よう仰せになりました、けれど今となりては夫れも叶ひますまい、併し斯までにおん身を持ち崩さるゝには何か深い仔細が御座りませう、お連れのものは何人でありました」
「今伴れ立ち歸りしは漢孫呂である、お師匠様、私が斯までに履み迷ひし一什十什、悉しくお話しせんほどに、暫らく休息せて玉はれよ」
「實に尤もなる仰せ、夜を通して一睡だもせられず、定めてお疲れ遊ばしたでござらう、早々お寐みあれよ」

悉達太子は、生きて再び淨飯王に會す顔がない、ウッランボッは最早や寺院に止め置いては呉れない、此の上は身を殺して其の罪を亡ぼすより、外に取るべき途はないと、死を決して二人の前を退ぞいた。

ウッランボッと優陀夷とは、出で行く太子の後を見送り、

「お師匠様」

「何でござる」

「御發明なる悉達太子様が、斯くまでに身を沈め給ふは、何人の勸めによるか、此れには深き仔細がござらんかと思ひまする」

「如何にも云はるゝ通り、されば予は此れより漢孫呂を取調べ見るであらう、其方は悉達太子のお目覺を待つて、篤と聞き訊して御覽あれ」

「畏こまりました」

と云つて、優陀夷の妻は、ウッランボッの前を辭して、太子の室へと進み往き、そ

して、

「太子様、太子様」

と二聲三聲呼び立てた。

けれど室内には何の答へもない、斯は不思議と、唐紙を開けて室内を見渡したが、太子の姿は更に見へなかつた、太子は何れへか逃げ出したのである。

優陀夷の妻は、氣も狂はんばかりに驚いた、若しやと思ひ振り返れば、雨戸が一枚外れて居る。急ぎ椽側より飛び下りて、一筋道の彼方を眺むれば、何やら黑いものが動いて居るので、必らず太子に相違なしと、

「太子様ア〳〵」

と聲を立てつゝ、後を追ふた。

暫らく駈け行く内に、黑き姿を見失なつて了つた。けれど女の一心、探さで置くべきかと優陀夷の妻は、氣を勵まして那方此方と、

「太子様ア〳〵」

と聲を振り上げながら探し廻して居つた。

スルと、バッタリ突き當つた一人の男があつた。暗き夜道に誰なるかを知ることは出來ない。もしや盜人の類にてはなきかと、懷劍逆手に身構へをして、

「何奴なるぞ」

「予ぢや〳〵」

「さういふ聲は我が夫優陀夷どのであつたか」

「オ、妻か」

「ア、良い所でお目に掛つた、實は云々」

「そは容易ならざること、いざ此の上は草の根を分けても、太子様のおん行衛を探せよ」

「承知いたしました」

優陀夷は、ウッランボッの寺院を出でゝ、田庄なる遊女町に到り、軒別に太子を探したけれど、其れらしき人は居らぬ、と云ふので今は詮方なしと、ウッランボッの寺院に歸らんとし、戻る途に、太子様ア〳〵と女の叫び聲を聞きつけた。もしやと思つて聲のする方に來り、于茲其の妻に出逢つたのである。

忠義ものなる夫婦二人は、狂氣のごとく西に東に、北へ南へ、探し廻つた。けれど太子は天に翔りしか地に潜りしか、其の影さへも見えなかつた。二人は探ね厭んで非ロ〳〵と涙を流して居た。

「我が夫様」

「なんぢや」

「これほど探しても、太子様のお姿は見えませぬ」

「さうぢや困つたことに相成つた」

「お探し申して居る間に、時間は餘程經ちました、最早や太子様は此の世には居られ

ますまい、妾は死んで太子様のお側に參りたう御座います」
「馬鹿なことを申す、我が身が死んで太子様が甦へられるか」
「お父君、おん母君、お兩人様に對しても申し譯が御座りません」
「下らぬ事を云ひ居るな、斯くいふ暇にも時間は經つ、疲れを休める時ではない、早く〳〵」
と優陀夷は其の妻を勵まして、二人はまたも捜索に取り掛つた、スルと微かに、
「オーイ〳〵」
と叫ぶ人聲が聞えた。
悉達太子は、我が身の罪を悔ひ、死を決してウッランポッの寺院を出ると、間もなく後より、
「太子様〳〵」
と呼ぶ聲が聞えたので、見付けられては一大事と、一目散に駈け出して、とある柳

の木に上り、そしらぬ振をして居ると、優陀夷夫婦は其の木の側に進み來つた。
太子は、此所ぞと息を殺して、見付けられじと身をすくめて居た。優陀夷夫婦は、太子が柳の木に上り居るとは知らない、其の儘其所を過ぎ去つて了つた。太子はヤレヤレと胸を撫で下し、
「死すべき時は今である」
と柳の枝に首を縊つた。が太子の縊くゝるや間もなく、一人の旅僧は柳の下を通りかゝり、ふと縊死して居るのに氣がつき、之れを下して介抱し、
「オーイ〳〵」
と呼び戻して居た。
釋迦が縊くゝらんとして、風にも折れない柳の枝が折れたといふのは、此の時のことを云ふのである。
優陀夷夫婦は、此の聲を聞きつけて駈けつけ來ると、今や自分等が探し求めて居る

悉達太子であるので、二人の喜びは譬ふるにものなく、

「有り難や旅僧どの」

「悉達太子様ァ」

「さてはおん身等は、此の經死人の身内なるか」

「如何にも、此れなるはカピラ城の太子様でござる、能くお助け下された、お禮は何れ後より致す」

「兎に角太子様を」

と妻は太子を抱き取り、

「太子様ァ〳〵」

と耳近く口を寄せ、大聲に呼び立てたので、太子は、

「ウーム」

と唸つて息を吹き返した。人々は水を與へ、背をたゝきなどして介抱をした、しば

らくすると太子は兩眼を開き、

「優陀夷夫婦であるか、予は生きては居られぬ」

「何と仰せ遊ばす、心得違ひを爲されますな」

と夫婦のものは、いろ〳〵と慰めつ嫌しつ、遂に太子の生命を取り留めた。太子の甦へつたのを見ると、旅僧は其の儘立ち歸らんとした。

「アイヤ旅僧どの」

「何でござる」

「おん禮の致したき事あり、城中までお越し下されよ」

「其の儀は平に御免を蒙むる」

「されば、何れの御方にして、お名前は何と仰せらるゝ、何れ後より御禮に罷り出でん」

「雲水の身の上、人を助くるは出家の勤、何の禮なぞ要りませう、名乘るべきほどの

ものでは御座らぬ」

「夫では餘りのことで御座る」

と夫婦のものが、色々に頼んだが、旅僧は遂に其の身許を明さずして、立ち去つて了つた。

優陀夷夫婦は、兎に角太子をウッランポッの寺院に連れ歸つた。ウッランポッは三人の歸り來れるを見て、大いに悅び、

「太子には恚なかりしか」

「已に危うかりし所を、旅僧のために云々でござる」

「それは重疊〳〵」

「漢孫呂は如何いたしました」

「只今お目通りいたさせまする、賢明なる太子樣が、何故あつて賤しき巷に足を入れられしか、全たく不審に思ひました、が今は此の事も明白に成りました」

「夫れは千萬辱じけなう御座る」

「だが優陀夷どの」

「ハイ」

「御油斷は出來ませぬぞ」

「なるほど」

「太子樣の御身體には、常に仇がつき纏つて居りまするぞ」

「仇と仰しやるは」

「今にお目通り致させまする」

優陀夷は、何人にもせよ、太子の仇とあるからは只一打に斬り倒さんと腕を撫つて

「早く〳〵」

と焦き立てた。

優夷陀は、太子の仇とは何奴なるか、イザ一打ちと待ち構へて居る所へ、繩にて縛

しめられたる、一人の惡僧が立ち現はれた。

「太子に仇なさんとするは其の方なるか」

「如何にも、貴殿が悉達どのに忠義をせらるゝ如く拙僧も提婆太子様に忠義を盡すに何の不思議があらうぞ、悉達どのを姪酒の巷に誘なひ、王位を卽せまいと計つたのは拙僧である、サア斬るなら斬れ、突くなら突け、生命は最初より提婆太子に差し上げてあるのぢや」

「憎くさ奴めが、いざ望みに任せて斬り捨てん」

と、優陀夷は刀を拔いて、突然立ち上がつた。

「ヤヨ待て優陀夷」

「ハッ」

「如何に彼等が予を誘はんとするも予が志にして堅固なりしならば、彼等に陷いられるのではなかつた、罪は予にあるぞ、彼を斬り殺すには及ばぬ、許して遣れよ」

「ぢやと申して」

「悉達どのとか、恩を被せて其の名を賣んとせらるゝも拙者は其の手に乘つて汝に味方するものならず、生命のあらん限りは、汝を仇と狙ひ、提婆太子様に忠義を盡すものである、無駄口たゝかず引つ込み召され」

惡僧漢孫呂の言ひ草には、如何にも優陀夷は忍ぶことが出來なかつた。突然立ち上つて、太子の止る袖を振り拂ひ、

「エイッ」

と叫んで斬り付けた。哀れ漢孫呂の首は其の胴を離れて了つた。

優陀夷は、提婆が太子に仇せんとして居ることは豫てより知つて居た。之れを知りながら太子を手放したは、全たく自分の落度である、此の後は一層心を注ければならぬ、と大いに自分の過ちを後悔した。

優陀夷は、太子を諫め、一先づ宮城に歸らるゝことにし、ウッランボッに暇乞ひを

なし、行列正しくカピラ城に向はれた。

町人共は、悉達太子の行列を迎へんとして、三々五々彼所に此所に、威儀を正し靜寂を保つて居た。スルと一人の旅僧は、鐘打ち鳴らして修行し歩き、今や太子の行列が、自分の傍を通過せんとするを、知らざるものゝ如く、平然として鐘を打ち鳴して居た。

御先拂ひをして居た役人は、

「控へろ旅僧」

と叫んだ。

けれど老たる旅僧の耳には、役人が制した聲は聞えなかつた。依然チン〳〵と鐘を打ち鳴して居るので、役人は大いた怒り、

「非人坊主め」

といひながら、旅僧の胸をついた。案外につき掛けられたので、旅僧はよろめきな

がら、バッタリと其れへ倒れて了つた。

敏くも斯くと認めたる、乘物の内なる悉達太子は、

「駕籠を下せ」

と命じて、乘物を出でゝ、旅僧の側へ往んとせられるので、お附の人々は、

「若君しばらく」

と止めたが、聞ぬ態して、ツカ〳〵と旅僧の前に進み、

「貴僧よ、貴僧は今朝我を救ひ給へる御仁ならずや、家來どもの無禮平にお許し下されい」

と云つた。

此れを聞いたる優陀夷夫婦は、太子の敏捷なるに呆れ、駈け來つて旅僧の前に平伏し、懇々と役人どもの不都合を詫び、いと親切に勞はり遣り、

「是非〳〵カピラ城まで御同道下されよ」

と、いろ〳〵と勸めた。けれど老僧は之れを肯なかつた。

悉達太子は、

「我れは貴僧に救はれ、今又た此所に貴僧に逢ふ、何かの因緣あることならん、宮城へのお越し叶はずば、おん身の名だけなりと聞せて給はれ」

と云つた。

老僧は、人々の親切なる介抱に、少なからず意を動かした。又た太子の最と優しき心に感じた。そして今まで包みし其の身の素性を明した。

此の老僧は、南海國の都にセンナラ城といふ所がある。此のセンナラ城王センマカ王の太子、傳聖太子といふのが、未だ若年の時にセキダンセンといふ山で、法禮菩薩の說敎を聞んと思ひ、密かに宮城を出たのが十五歲の時であつた。

傳聖太子は、其の說敎を聞き、遂に發心して王位を捨て、今年七十になるまで、身を雲水に托し、たゞ善事を積みて未來を樂しんで居るのである。

と云ふことを聞いた悉達太子は、尙ほ其の高德が慕はしくなり、是非にカピラ城までと、言葉を盡して伴れ歸らんとしたが、老僧は之を肯ずして、立ち去つて了つた。

悉達太子は、カピラ城に歸つた後は、差したることもなく年月を送る內に早くも十五歲となつた。太子が十五歲になられると、淨飯王は、位を太子に讓つて隱居せられた。

優陀夷は、太子が王位に卽かれたので、早く皇后を冊立せられんことを乞ひ、之れを見立てんと思つて居る所へ、豫ねて優陀夷の家來にして武者修行の爲め、諸國を巡遊して居た、右梵兒なるものが歸つて來た。

「右梵兒よく歸りました」

「長らく勝手を仕まつり恐縮仕つります、我が君樣には常に御健勝、右梵兒恐悅に存じます」

「なが〳〵の修業、餘程腕前も上達致したらう」

「所々方々巡廻いたし參りましたが、不幸にも右梵兒が腕を磨くべきものに出逢ふことが出來ませんで、いと殘念に存じ居りまする」

「又たしても高慢な事を申す、必らず我が身の勝れ居ることを口にしてはならんぞ」

「ハッ」

「其方の旅行中に、身分ある十四歳の美人に逢はなかつたか」

「左樣でございます、私が修行中身分あるお方にして、美人と申しますれば、海衛國の王女ヤユダラ姫の右に出るものは有ません」

「ハ、ア、海衛國の王女とあらば、身分に於いて不足はない、が今の王妃嬰陀彌殿と容貌は何らが宜いのぢや」

「ヤユダラ姫と申すは、なか〳〵に嬰陀彌殿などが側にも寄れるものでは御座いません、畏れ多きことながら、我が殿中に美人は多く御座いまするが、ヤユダラ姫に比ぶお方は一人も御座いません」

「それは宜いことを聞して吳れた」

と優陀夷は、早速淨飯王に竭して、此の事を言上した。

王は、

「其方早速海衛國に赴き迎へ取るやうに計らひ來れ」

と命じた。

優陀夷は、早々旅裝を調へ、右梵兒を伴につれて、海衛國に至り、結婚のことを申し込んだ。

海衛國王は、悉達太子の賢明なることは、豫てより聞いて居た。其の皇后に貰はれたのだから、一も二もなく之れを承諾した。

ソコで優陀夷は、婚約を取り極め、且つ吉日を定めて、いよ〳〵印度の習慣として悉達太子がヤユダラ姫を迎へに行く日限までも定めて歸つた。そして此の事を淨飯王及び悉達太子に言上した。

淨飯王は、

「其方、悉達に隨伴し、ヤユダラ姫を迎ひ歸れよ」

と優陀夷に命ぜられた。

ソコで、優陀夷は勇猛なる右梵兒を始めとし、其の他の勇士をして、悉達太子を護衛せしめ、海衛國に赴いた。

提婆は、悉達太子を墮落せしめんとして成らず後ち又た馬將軍をして太子を暗殺せしめんとして失敗に歸し、何とかして年來の鬱憤を晴さんと苦慮しつゝある所へ、太子が海衛國へ出掛けたとの注進を得たので、大いに喜んで其の歸路を待ち受け、之れを亡きものにせんと企だてた。

悉達太子は、海衛國に至り、宮城に入り三日間の滯在で、いろ〳〵と饗應され、婚禮も無事に濟んだ、が此の間の優陀夷の苦心といふものは一通りでなかつた。苟しくも一國の王が他國の城内に逗留して居るのである、何時如何なる謀反人が出るかも知

れない、夜の目も合さずに太子の身を守護して居つた。

いよ〳〵三日目の晩になり、明日は早朝にヤユダラ姫と共にカピラ城に歸るといふので、海衛國の大王は、山海の珍味を列べて厚く太子を饗應された。兩國の重臣も其の席に連なり、陪食を仰せ付られた。

優陀夷は密かに右梵兒を招き、

「右梵兒」

「ハッ」

「毎日の警固大儀であるのう」

「何事もなく、先づは恐悦至極に存じまする」

「いよ〳〵今晩が終りぢや、必らず油斷すなよ」

「心得ました」

「今夜は、重臣擧つて陪食を仰付けられる、一層の注意が肝要であるぞ」

「畏まりました」

右梵兒は、命を受けて單身身を潜めて庭園の隅に匿れて居た。油斷なく眼を四方に配つて居ると、宴酣にして夜半近くなり、籔影に於いて、バタ〳〵と時ならぬ、鳥の羽ばたく音が聞えた、たゞ事ならじと右梵兒は、眼を音する方に轉じた。

スルと何か黑いものが見える。密かに足音を盜んで、其の影に近づくと、一人の曲者が火矢を取つて狙ひを定めて居た。其の狙ひは正しく悉達太子である。將に其の矢を放たんとする所で、之れを放たば狙ひは狂はず確かに太子に的中することは間違ひない、と云つて曲者の傍までは三間ばかりあるので、其れを飛び行く暇には、曲者を押へ得るも、矢は太子の胸に當るのである。

古今獨歩といはれた、智勇兼備の右梵兒、氣合の必要は此の時と、

「エイッ、ヤッ」

と大聲に叫んだ。

「那の聲は確かに右梵兒」

「優陀夷汕斷すな」

と、右梵兒の叫び聲に驚かされて、人々皆な總立となつた、此の時早くも火矢は飛び來つて、太子の膝の右側を通過した。

ヤユダラ姫も大いに驚かれ、身を以て太子を圍はれた。大王の怒は非常なもので、

「何奴なるぞ、此の席へ火矢を送るとは、不屆至極の奴である、召捕つて吟味いたせ」

と室も搖がんばかりの大聲で怒鳴りつけた。

重臣等は顏色を變へて、ブル〳〵と慄へて居た、スルと右梵兒は一人の曲者を遙かの籔蔭から、庭園目蒐けて投げつけ、駈けつけ來りて、曲者には目もかけず、

「我が君」

「何ぢや、右梵兒」

「太子樣には、御怪我はござりませんか」

「太子様には御無事で居らせらるぞ」
「それ聞いて安心いたしました、實は云々で、氣合の聲で、曲者に狙ひを外させやうと存じましたが、其の聲のために、太子様が身を動かせられては一大事と夫ればかりを心配致し居りました」
「其の方も能く知るごとく、太子様は聲に慄へるお方ではない、心配致すことは要ぬが曲者は如何致した、大切なる曲者此所へ引け」
「ハヽッ」
と答へて、右梵兒は曲者の側に至り、襟髪を攫みながら、雙手にぶら下げて優陀夷の前に引きすえた。曲者は金剛力の右梵兒に投げつけられたので、口から泡を吹き出して、殆んど息は通はなかつた。右梵兒は拳を固めて其の脊を打ち、水を與へて之れを介抱し、やつと曲者を蘇生させた。
海衛國の大王は、虚外の曲者に非常に心配した。若し其の曲者が海衛國のものならんには、如何なる疑ひを起されても、之れを辯解くことは出來ない。

「右梵兒とやら」
「ハッ」
「其の方の働き感心の至り、悉達どのには好き家來を持たれて羨やましく思ふぞ」
「恐れ入りました」
「其の曲者、此方にて吟味いたすも心苦しい、大儀ながら其方の手にて吟味致し呉れよ、若し我が國のものならんには、其の九族を重刑に處し、悉達どのに云ひ譯いたすで有う」
「心得ました」
右梵兒は、委細承知して、曲者の方に向き直り、
「如何に曲者、汝は何れのものにて、誰に頼まれて、悉達太子様を狙ひ討たんとはしたゝ、眞直ぐに白狀いたせ、若し彼是と詐るに於いては、右梵兒が一本の指にて汝の命

は取り止め呉れるぞ、まだ白狀せないか、ソラ此の右梵兒の一本の指は、何うしても其の方に白狀さすのだ、痛い思ひをしない內に、早く眞直に白狀せよ」

と云つて、右梵兒は、右の人指指を以て、曲者の肋の邊りを突き立つた。曲者は右梵兒の力には驚いたと見え、

「右梵兒樣、最う御許し下さい、貴下樣の力量は能く存じ居ります」

「予を存じ居るとは、其の方は提婆太子に賴まれし者であらうが」

「お察しの如く提婆太子樣に賴まれましたものでございます」

「提婆太子は何れに居らるゝか」

「されば提婆殿は、澤山の山賊どもを語らひ、私が若し誤まつた時は、悉達太子樣の歸路を待ち受け、太子樣を討ち取んと、本道山路殘らず固めて、今や遲しと太子樣を待ち受け居りまする、トテも無事に御歸國は出來ますまい」

「よく申した、褒美として其の方の命は助けて遣はしたいが、其方のごときものは、

生命があれば又た〳〵人を害するであらうが」

「此れより心を入れ換ると申した所で、眞逆さうかと信じても貰へますまい、斯うなるからは致方がありません、早く生命を奪つて下されよ」

「よき覺悟である、望みに任せて打ち殺し呉れん」

と云つて右梵兒は、拳を固めて振り上げた。斯と見たる太子は、

「右梵兒しばらく」

「ハッ」

「已に有體に白狀した上は、其の者の罪は消滅した、生命を助けて許して遣はせ」

「ぢやと申して、此のものを逃せば、又も提婆太子の手足となつて働らきませう」

「提婆の命を奉ずるもの、此のもの一人ではない、此のものを殺して後に仇なすものがなければ兎に角、此の曲者を殺したとて、ヤハリ警固を怠たることは出來ない、注意をするとすれば此のもの一人居たとて、別に恐るゝことは有まい、仇なすものは殺

し盡せぬ、が仁情は仇なす心を遂には溶すものぞ、許して遣はせよ」

「ハ、ッ」

と畏まつて、右梵兒は、曲者の襟髪を取り、彼方へと突きつけた。曲者は、

「有り難うござります」

と云つて、雲を霞と逃げ去つた。

「悉達どのには御怪我がなくて重畳〳〵」

「有り難う存じます、お騒がせ申しました」

「我が國のものが、若しや無法な事を仕出かしたかと、何の悠心配したか知れません」

「イヤ〳〵決して左樣な疑ひは持ちません」

「曲者のために、却つて悉達どのゝ生命は安全、併し曲者の云ふごとくでは、悉達どのゝ御歸路が案ぜられる、如何致されたものであらう」

と、海衛國の大王は、陪食しつゝある重臣等に尋ねられた。

海衛國の重臣等は、首を鳩めていろ〳〵と協議した。

「我國より兵隊を以て護衛いたすが宜しう御座らう」

「敵の兵數も知れず、明早朝御立出とあつては其の準備が調ひますまい」

「暫らく御滯在を願ひ、敵の油斷を見て、夜に乘じて逃れられるが宜しからうと存ずる」

「我々と違つて、苟しくも一國の王といはれるものが、一旦取り定めた日取を變更致しては、人民の困難が堪へきれますまい」

などゝ種々の評議があつたが、何れも此れならばといふ妙策も出なかつた。たゞ時刻を過して居る内に、一人の重臣が進み出で、

「今宵の内に、此の宮城をお免れ遊ばし、陸の危險を避けて、海路センナラ國に至られなば、敵の裏をかく事が出來て、太子樣のお身體は安全であらうかと存じます」

と云つた。

悉達太子は、

「其れは頗る妙計と思はれる、然らば其の準備をたのむ」

と云つて、密かに優陀夷を招き寄せられ、

「サテ優陀夷」

「ハッ」

「此の嚴重なる城内にまで忍び入つて予を狙ふものがあつた」

「左樣でございます」

「如何なるものあつて、予が海路を取るといふことを、提婆太子に報せんにも限らぬ」

「ハッ」

「殊にセンナラ國からは、カピラ城まで餘程の里數がある」

「ハイ」

「さすれば其の道中に何んな變事あるかも知れない」

「御尤もで御座います」

「よつて、余は云々せんと思ふのだから、左樣心得よ」

「ハッ」

ソコで、悉達太子は速かに、舟でお歸りと云ふので、夫れから夫れへと傳へ、大變の騷動であつた。

此の時の舟は、普通の商船のごとく裝ほひ。僅ばかりの人數で太子を護衛したが、佛の在ます船で、順風のお蔭を蒙り、五十里を一日に漕ぎ付け、太子は危難を免れられたと、有難家には信ぜられて居るが、事實は然うではない、太子は依然陸路を歸つたので、舟を出したのは、敵の間者を欺むく手段であつた。

釋迦の傳記には、此の時順風を得て、佛身の危難を遁れたのみならず、摩耶を呪つた惡行者も、太子を墮落せしめんとした惡僧も、佛罰を蒙つて地中に埋められたと云ひ、又た太子が縊つた柳の枝も、風に折れない柳の枝が、佛を救はんとして其の枝が

折れたといひ、如何にも不思議さうに、或る者が、絶えず太子の身を保護したやうに傳へられて居るのである。けれど不思議なる力あるものが、太子を保護するものならば、之れを害せんとする枝葉の惡僧惡徒等を懲さんよりも、根本たる提婆一人を亡くすれば宜い譯である。

總て古代の作者等が、其の人物に重味をつけんとして、或るものゝ力を借りて居るのであらうが、これ却つて釋迦其の人の價値を落すものと云はねばならぬ。釋迦は其の身の危難を逃るゝには、決して或るものゝ力を借りたのではなく、自分が修養した、學と才とはよつて、よく其の危害を免かれたものであらうと思ふ。

釋迦が海路によつて歸國するといふことは、直ちに提婆の耳に入つた。提婆は其の人數を分ち、センナラ國とカピラ城との間に向はしめ、いよ／＼悉達太子が上陸したら、急使を立てるやうに命じ、自分は五十人ばかりの惡徒を引き連れて太子の歸りを待つて居た。

折しも三四十人の人數に護衛せられた一挺の乘物が遙かに賊徒の眼に映つたので、

「あれこそ悉達太子」

と急いで提婆の許に駈けつけた。

提婆太子は、今や來ると待ち設けて居る所へ、一人の手下が走つて來た。

「太子樣」

「何ぢや」

「遙かに一挺の籠が見えます」

「フム」

「三十四五人の人數によつて取り圍まれて居りまする、正しく悉達太子樣に相違ございません」

「大儀であつた」

「程なく參りまする、早く御準備遊ばしませ」

「よく他のものにも言ひ傳へよ」

「畏こまりました」

提婆は、弓矢を取つて、山の中腹に來り、待つ間もなく、

「エッサ〳〵」

と一挺の乘物が急いで來た、占めたと提婆は狙ひを定めて、

「プシッ」

と射た矢は、誤またず乘物の中へ入つた。

乘物を舁いで居たものは、驚いて乘物を投げ捨てゝ逃げ去つて了つた。籠を護衛して居た人々も、雲を霞と逃げ散つた。

斯くと見たる提婆は

「意氣地のない奴等ではある、一本の矢に其の主を捨てゝ逃げ走るとは何たる事だ、確かに手應へはあつた、者共籠の中を檢ためよ」

と云つた。

「ハッ」

と答へて手下の者等は、バラ〳〵と籠の側に近づいた。提婆も、

「して遣つたり」

と今は安神して、悠々と後より續いて來た。

籠を取り卷いた五六十人の惡徒等は、籠の中がヒッソリとして居るので、最早や息は絶えて了つたのだ、と悅び勇んで、ガラリと乘物の戸を左右に開いた。スルと一人の男は、

「ハ、、、」

と大笑ひをしながら出て來たので、戸を開けた二人のものは、思はず其所に尻餅を搗いた。

驚いた惡徒等は、旨く悉達太子を射殺したと思ひの外一人の男が現はれたので、

「おの〳〵用意あれ」
と刀を引き抜き、ふと見れば、世にも名高き勇士、優陀夷の家來、右梵兒である。
右梵兒は、
「悉達太子様は、汝等ごときものゝ手に生命を落されるお方ではない、早くも海路をカピラ城にお歸りに成つた。汝等が此所に待ち伏せ居ると知つて、代つて右梵兒が相手に參つた、汝等ごときが幾百千人來るとも、更に驚く右梵兒ならず、打たれるものなら打つて見よ、斬られるものなら斬つて見よ」
と大手を擴げて突つ立つた。
右梵兒の力量は、誰知らぬものはないので、
「叶はぬ〳〵」
「逃げろ〳〵」
と早くも怖氣づいて逃げ出さんとするを、提婆は、

「右梵兒とて神ではない、寄り掛つて討ち取れ」
と大聲に呼び立つた。
此の聲に勵まされた惡徒等は、
「返せ〳〵」
「汚なし返せ」
「相手は一人だ、右梵兒とて何程の事がある、かゝれ〳〵」
と、一同刀を抜きつれて、右梵兒を取り卷いた。
右梵兒は、
「カラ〳〵」
と大口を開けて突つ立ちながら笑つて居た。けれど誰あつて手出しをするものがなかつた。
右梵兒は、

「蛆虫ごとき汝等、生命を奪るも可哀さうだ、手向ひせずば許して遣る、が許せないのは我が君に仇なす提婆」

と云ひも終らず、身を翻へして、一目散に提婆を目蒐けて飛びかゝつた。

右梵兒は、聞えたる勇士である、誰あつて彼に手向ひするものはない、彼の通る所は途從がつて開けるので、右梵兒は意のごとく、山の中腹なる提婆の傍に駈けつけた

右梵兒は、

「たとひ貴ときご身分なりとも、我が君悉達太子に仇なさるからは、右梵兒おん生命を貰ひ受ける、サア御覺悟めされよ」

と呼はつて、提婆太子に飛びかゝらんとした。

此の時、提婆の傍近く控へ居りたる四人の勇士は、

「無禮ものめが」

と大喝一聲、右梵兒の右左から、二人づゝ四人が一時に、刀抜く間もなく、跳りか

かつて右梵兒に組みついた。

右梵兒は、瞬く間に二人を蹴倒し、一人は拳固ではり倒されたので、殘る一人は逃げ出した。此の隙を見て提婆は後をも見ずに逃げ去つた。

彼是する内に、八方より刀を抜きつれて斬つて掛る奴を、或は右に、或は左に、擲り倒したので、惡徒等は味方の刀に其の生命を失なつたものが多かつた。暫らく多勢を頼りに戰つて居た惡徒等は次第に其の人數が減じて來るので、トテも右梵兒には敵し難く、

「早く逃げろ」

と一人が駈け出したので、我も〳〵と四方に散つて了つた。

右梵兒は、全たく惡徒等を追ひ散して了つたので今は安全なりと、此の由を後なる悉達太子に報じ、自分は尙ほ前途の惡徒を追ひ拂はんと、三四十人の部下とゝもに道を急いだ、が惡徒等は右梵兒の勇に怖れたか、其の後道を妨たぐるものもなかつた。

悉達太子は、旨く敵を圖つて、惡徒等を右梵兒一人で平らげさせ、無事にカピラ城に歸られた。右梵兒の名は此れより諸方に擴まり、今に至るまで其の名は人口に膾炙されて居るのである。

悉達太子は、無事カピラ城に歸り、ヤユダラ皇后との仲も睦まじく、何事もなく暮して居る內に、ヤユダラ皇后は、羅悟亂太子を擧げた。

皇儲が出來たので、淨飯王の悅びは一方ならずであつた。が太子は幸ひに皇儲が出來たので、其位を羅悟亂太子に讓り、自からは其の時代印度で流行して居つた佛學の研究に其の身を委ねんとの志を起した。

或る日、優陀夷が、悉達太子の前へ出た。スルと太子は、

「優陀夷」

「ハイ」

「其の方は、何の爲めに世の中に生れたか」

「……」

「何の爲めに生れ出でしか返答は出來ぬか」

「……」

「しからば其の方は人間でありながら其の務か知らぬのか」

「人間の務めとしては、臣はたゞ陛下に忠義を盡すのみと心得居りまする」

「予に忠義を盡すは、何のためであるか」

「……」

「予のためであるか、汝自身のためであるか、下萬民のためであるか、何うぢや」

「畏れながら、陛下に盡すは嫌て自分のためとなり、又人民のためかと心得まする」

「人の爲すべき務は、萬民のためであるとすれば、何のために人は生れて來たか、といふ問には答へが出來るではないか」

「さやうで御座います」

「萬民のためとして計るならば、萬民の心を支配するに若くことはないと思ふが何うじや」

「心を支配すると仰せに成りますと如何致されまするか」

「人の心は何うでもなるものぢや」

「ハイ」

「善に導けば善となり、惡に導けば惡となるのだ」

「左樣で御座います」

「予は此れより人の心を支配せんと思ふのぢや。則ち人を善道に導くことをして、此の世に生れた務めを終りたい考へであるぞ」

「結構なことゝ存じます」

「其の方も賛成して呉れるか」

「ハイ」

「所で、政事では人の心は支配が出來ない、又た出來るとした所で、僅かに一國に止まることとで、其の範圍が極めて狹いのだ」

「……」

「故に予は佛門に身を投じて、廣く三千世界の人の心を支配し、生れて來た務めを知らすばかりでなく、死しての後の務めも知したいと思ふのだ」

「尊きおん身を佛門に投ずると仰せになりまするか」

「如何にも」

「夫れはお止まり下さいまするやう、願ひ上げまする」

「ナゼか」

「一國の王たるものは、然く小事にまで、心を寄せるものでは有ません」

「小事とな」

「國王の下には、軍を司どるものあり、學を司どるものあり、民心を治むる刑を司ど

るものあり、理財、宗教、其の他いろ〳〵のものを司どるものが居りまする」

「なるほど」

「それ等のものを司どるのが、王たるものゝ務かと存じまする。今陛下の仰せらるゝは、王たるものゝ役目の一部分に心を寄せられんと爲さるものかと存じます」

「いや〳〵、さにあらず、人心を支配するは、前にも云ふたごとく、三千世界の無量の人を支配するので、王たるものは三千世界の一小區域たる一部を司どつて居るのであるぞ」

「ハイ」

「且つ今の世の中を見るに、よく人心を支配するの道は開けて居ない、惡人が多くして、罪惡を重ねるものが絶へないのも、之を善道に導く良法がないからである」

「ハイ」

「予は、其の良法を案出して、よく萬民を救ふ考へである」

「なるほど、陛下の賢明を以て、其の良法を定められる事は出來ませうが、今陛下が其の位を去つて、佛門に身を投ぜられなば、老たる父君、幼き太子樣は、何うして此の國を治められませう、其の儀は必らず御中止のほどを願ひ上げまする」

「イヤ〳〵此の國を治めるには、老たりといへども父君あり、又は後を襲ぐべき太子もある。殊に汝のごとき忠臣ある上は、少しの心配はない、予が身こそ萬民のために犧牲に供すべき身體ではないか」

「以ての外なる仰せと存じまする。此の儀は父君とも能く〳〵御相談の上にて、御再考あらせられんことを願ひ上げまする」

「必らず今日に限つた事もない、が予の決心は動かされぬぞ」

優陀夷は大いに驚いた。悉達太子の前を退くと、直ちに淨飯王の御前に行つた。

「我が君樣」

「なんぢや」

「一大事で御座います」
「一大事とは」
「實は悉達太子様が、云々仰せでございます」
「馬鹿が」
「太王陛下より、宜しくお諫め下さるやうに願ひ上げまする」
「よし〳〵、彼れは慢心したと見へる、彼れでなくとも其の道ならば、誰なりと博學なる僧に申しつければ足ることではないか」
「左様に心得まする」
「自分がせなければ他のものには出來ないと思ふからだ、此の慢心は、予が挫いて呉れるぞ」
優陀夷は大いに喜び、呉々も太王に頼み置いて、御前を下つた。
優陀夷は、我が家へ歸ると、此の事を其の妻に語つた。妻は、

「悉達太子様は、一旦さう仰せになつたら、之を思ひ止まられるやうな事は有りますまい」
「さうだ、其れについて心配して居るのぢや」
「貴郎は、モウ其の準備をなさりましたか」
「準備とは」
「城門〳〵の固めを急がなければ、何時抜け出られるが知れません」
「さうであつた、夫れは宜い所に氣がついた」
といふので、優陀夷は早速右梵兒を呼び寄せた。右梵兒は急のお召しに、取るものも取り敢ず遣つて來た。
「お呼びでございまするか」
「右梵兒」
「ハッ」

「實は云々斯々であるのだ」

「エッ」

「驚いても仕方がない、ついては何時城内を抜け出られるかも知れない。門衛は固より、車夫、御者に至るまでも、普ねく此の事を通知して、若しもの時は此の優陀夷まで知らすやう、且つ報知を怠つたものは、後日嚴罰に處するやうに申し聞けよ」

「畏まりました」

「急げよ、夜中は一層油斷なきやうにせよ」

「心得ました」

右梵兒は、優陀夷の前を退き、直ちに命のごとく、それ〳〵に傳へ、いと嚴重に守備を布いた。

悉達太子は、父君淨飯王からも、嚴しく其の不心得を覺された。けれど太子は一旦思ひが決すると、決して之を更めない。極めて意志の堅い人であつたので、遂に淨飯

王の意にも從はず、身を哲理研究に委ねたのである。

悉達太子が、城門を忍び出た事については、佛力の加護によつたと云ふ說が多いのであるが、一つも信ずるには足らぬけれど、其の當時の人によつて、釋迦なる人が如何に信ぜられて居たかを伺ふことが出來るから、忘說なる點は諸君の今日の頭腦を以て判斷して貰ふことにする。

悉達太子は、或る夜笛の音を聞いたので、

「これは」

と思つて目を覺し、ふと見ると紫色の雲がたなびいて、其の上に一人の美人が立つて居た。

其の美人は、嘗つて田庄と云ふ所で、自分が寵愛した事のある、ハスミッタといふ女によく似て居つた。太子は不審に思つて、

「汝はハスミッタにあらずや」

「さやうで御座います」
「何故あつて斯る所へ來りしか」
「妾は、今は此の世のものでは有りません」
「フム」
「妾は、先日病死いたしましたが、太子の事が忘れがたく、こゝに姿を現はしたのでございます」
「それは不思議である」
「太子には、其の身死した後は、如何なり行くものと思ひ召さるゝか」
「死んでの後は、予には想像が出來ない」
「善事をなして死するは、死後通力を得て、妾のごとく自由自在に天地間を廻ることが出來まする」
「さうであるか」

「太子様は、一日も早く人間の煩惱を捨てゝ、佛の道に入り玉はるやうに願ひ上げます」
「其の方は何れに居るか」
「ダンドクセンと申す所に、もろ〳〵の佛と共に棲つて居ります」
「ダンドクセンには何時でも往くことが出來るか」
「太子様が、佛門に入り御修行なさる御思召が有りますれば、妾は何時にても御案内いたします」
「何うすれば、我が意をお前に通ずる事が出來るか」
「太子様が其の心にお成になれば、其の意は忽ちに妾に通じますから早速お迎ひに參ります」
悉達太子は、尙もいろ〳〵の事を聞かんとする内に、其の姿は消えて了つた。悉達太子は、

「ア、不思議なことがあるものではある」

と思ふと、夢は醒めた。

太子は、夢であつたか、夢にしても不思議である、と思ひながら直ぐに起きて平素のごとく庭園を散歩して、朝飯を濟せた。

其の日は、終日其の事が氣に掛つて居た。其の夜になると又たハスミッタが、ダンドクセンへ來ひと云ふ。太子も斯んな夢が毎晩〳〵幾夜となく續くので、全たく夢ではない、佛が我を導くのであらう、と思ふと往きたくなつて來る、世の中の事が厭に成つて、其の事ばかりが頭に殘つて居た。

ソコで太子は或る夜、風の激しきを幸ひ、今夜こそと仕度をして、いよ〳〵ダンドクセンへ登らんと立ち上ると、ヤユダラ皇后が之れを見つけ、

「我が君」

「ア、ヤユダラか」

「ハイ」

「予は豫てより志せる、ダンドクセンへ登るぞ」

「アラ、情なきことを仰せられます、是非然うなさるなら、前より妾に仰せ聞け下さりません」

「此れも修行のためだ、惡く思ふなヤユダラよ」

「そんな事を遊ばしては、父君母君に申し譯がありません」

「申し譯あるやうに書遺を致しある、心配いたすな」

「ぢやと申して、夫れでは餘りでございます」

「騷ぐな、人が目を覺さば、予の苦心も無効となる」

「いえ〳〵何う仰しやつても、優陀夷よりも堅く頼まれて居りまする、此儘お出遊ばす事は出來ません」

「佛門に入つたとて、お前を見捨るのではないが、妨げいたさば離縁ないたすぞ」

「それは又た御無體な」

「予の志を妨げるものは妻でない、臣でないぞ」

「さうまで仰せに成りますれば致し方が御座いません、何卒父君母君の御許しだけお受け下さい」

「許しを受けらるれば、お前が云はなくとも予が受ける、けれど許しは受けられないから、止むなく斯なつたのだ、此の上は羅悟亂をよく育て、予が歸るを待ち居れよ」

「それでは、妾もお連れ下さりませ」

と、ヤユダラ皇后は、太子の袖をシッカと押へて放さなかつた。悉達太子も何時まで斯てあるべきでない、と思はれて飛び上るや力に任せ駈け出されたので、袖は離れてヤユダラ皇后は、後へにドーと倒れた。

悉達太子は、妻を振り捨てゝ戸外へ出た。スルと雲とも云へず霧とも云へないやうなものに押しつゝまれ、だん〳〵と光明ある方へ身體を運ばれた。

しばらくすゐと、厩の近くへ出て來たので、馬に乘つてダンドクセンへ赴かんものと、馬丁の寐て居る所の小舍の前に立ち、戸を叩いて、

「オイ〳〵」

と呼んだ。が馬丁は、なか〳〵目を覺さなかつた。いくら呼んでも目を覺まさないト云つて餘り大きな聲をすることは出來ない。太子も困つて居ると、厩に繋がれて居た、太子の愛する健渉といふ馬が、

「ヒヽーン」

と、聲高く嘶いて、四方を睨りちらすので、前後も知らず寐入つてゐた馬丁が思はず目を覺すと、太子が、

「コラ〳〵」

と呼んで居たのを聞き、驚いて戸外に出で、

「これ勿體なし、夜中に何れへお出ましに成りまする」

「一寸ダンドクセンまで參るのぢや、急いで馬を引け」
「夜中のお出ましは、優陀夷さままで屆けねば成りません、嚴しきお達しがござりました」
「構はぬから早く馬を引け」
「私の落度になりますから、何う仰しやつても、御免を蒙ります」
「なんで落度になるのだ、予の云ひ付け通りにして落度になる筈がない、馬鹿な事を申すな」
「たとへ陛下の仰せなりとも、今度ばかりはお伴が出來ません、且つ假し馬にお召しに成つても、御門〳〵は嚴重なる警戒で御座います、蟻一匹だも出ることは出來ません、どうぞ御止まりを願ひます」
「心配するな、城門は開きあるぞ、グヅ〳〵云はずと馬を引け」
「では、一寸優陀夷樣にお屆けして參りませう」

「何と申す、其の方までが、予の發心を妨げなすか、予は平素其方を賴りに思ひ居りしに、今は予の命を背くか、是非なき事である、然らば馬は要らぬ、予は歩いて參らう」
「勿體ない事を仰せられます、優陀夷樣よりは、堅く申し付けられ居りまするが、タトヒ此の身は八ツ裂にせらるゝも、常の御恩に報ずるため、お伴いたすでございませう、斯までに御決心なりましたのも、容易の事ではござりますまい、お待ち下さりませ、直ぐに馬をば引きまする」
といつて馬丁は、健渉といふ駿馬を引き出し、鞍を置いて太子の前へ連れて來た。
太子は、
「よく承知し呉れた、汝の忠義は忘れぬぞ」
と涙を流しつゝ、ヒラリと馬に跨がつて、熟練したる手綱を引れたので、健渉は雲を霞と駈け出した。

暫くすると馬丁は、

「アレ御覽なされよ」

「なんぢや」

「我が君樣を見張の番人等が、あの樣に篝火をたいて居ります」

「なるほどのう」

「那れでは忍び出る事は出來ません」

「如何いたしたものであらう」

「威貫門へお出なされよ」

「さうだ、威貫門は開ずの門である、彼所には番人は居るまい」

と、馬の頭をたて直し、威貫門に駈けつけた。スルと其所には幸ひに番人は居らなかつた、けれど此の門は開けずの門と稱へて番人をも置かない位であるから、容易に此の門を開けることが出來ないのみならず、此の門を飛び越すことは無論出來ない。

如何したものであらう、と太子も馬丁も暫し思案に暮れて居た。スルと俄かに怪風起り、黑雲四方より集まり、車軸を流すかと思はれるやうな大雨となつた。

「これは困つた事に成つて來た」

「雨具の御用意はありませんか」

「雨具の用意とては無論ない、如何いたしたものであらう」

「一走り、雨具を持參いたしませう」

「いや待て」

「ハッ」

「此れより佛門に入り修行する身が、そんな贅澤は云はれない、降らば降れ此の儘に辛棒するであらう」

と二人のものが話して居る内に、ピカ〳〵と光は四方に散つた、ゴロ〳〵と鳴る音は急に近くなつて來た。スルと一聲激しく鳴たと思ふ間もなく、光は二人の眼を閉ぢ

させた。

「アッ」

と思ふ間に、風も雨も靜まつた。二人は、ヤレ〳〵と思ふと、駿馬の健渉は、一聲高く、

「ヒ、ーン」

と嘶いて、一目散に駈け出した。不思議なることには、今まで堅固であつた威貫門は落雷のために微塵になつて了つたので、苦もなく城内を拔け出すことが出來たのである。

太子は、飛び立つばかりに悅び、天を拜して感謝の涙を流した。それより五千里の長途を、ヒタ走りに乘りきつて、一夜の内にダンドクセンに達した。けれど斯る長途の奔走にも拘らず、二人は少しの疲勞も感じなかつた。

時に太子は十九歳であつた。

悉達太子は、首尾よく城門を忍び出で、ダンドクセンへ上つて了つた。翌日になると、城内の家來等は、最早や太子の起き出でらるゝ時なのに、其の姿を見せられないので、皆々不審に思ひ、太子の寢室を伺つたが、太子は居られなかつた。係りのもの等は、早速此の事を優陀夷に知らせた。

優陀夷は大いに驚き、妻にも此の事を告げ、急ぎ登城して、各間〳〵を調べ、又各門の番人を呼び寄せて、嚴重に取り調べた。

けれど番人等は、

「毎夜〳〵、人數を增して非常を戒しめ居りましたが、一睡も結んだことなき我れ我れの目に、太子の御姿は映りませぬ、城外へ出られるやうな事は有ません」

と異口同音に答へた。

優陀夷が、表役人を調べつゝある間に、其の妻は、奥の女中どもを取調べて居つたけれど、何れも、

「知りませぬ」
「存じませぬ」
と云ふばかりで、少しも手係りだも得る事が出來なかつた。優陀夷の妻は、いくら責め立つるも、知らないのが事實であらう、此の上嚴しく云ひ立つれば、罪を人に被せねばならぬ、しかず穩便に濟さんと、奥女中どもを立ち去らしめ、自からも其の座を引き退らんとした。

スルと、老女に南柯といふ、心良らぬものがあつた。此のものが忠義顔に、今こそ優陀夷の妻を苦しめんと、

「しばらく」
「何でございます」
「如何なされまするか」
「何事も穩便にいたしませう、全く皆なのものも知ない樣子に見えまする」

「これは怪しからぬ事を仰せらるゝ、斯る大切なる出來事ありたるに、其の責任も問はず、婦人彌さまに申し上げざるは、役目を疎かにすると申すもの、あなた樣が上に立つて其の樣になさるから下のものまでが、役目を疎かにして今度のやうな不取締が起つたので御座いませう、此の南柯は、早速婦人彌樣に申しあげ、充分に其の責を負せまする」
「イヤ、待たれよ、南柯どの」
「待てとは」
「斯る事を、月の方樣に申し上げれば、其の御心配はいかばかり、よく〳〵調べた後にするも、決して遲くは有りますまい」
「兎や角と申して、悉達太子樣の詮議を妨たげらるゝは、何か御考へあつての事で御座らう、タトへ幾らお隱しなさらうとなさつても、此の事は疾に妾より言上致し置きました」

「最早、月の方の御耳に入れられましたか」
「如何にも」
南柯は、何所までも悪々しく云ひ放つので、優陀夷の妻は、すでに月の方のお耳に入つたとすれば、早く夫に知らして其の處置をなさん、かゝる女と問答する場合でない、と思つたので、其の儘席を立つて我が家へ歸つた。
南柯は、月の方なる嬌曇彌の前に出でゝ、
「申し上げます」
「なんぢや」
「悉達太子様の御行衛が不明になりました」
「なんと申す、夫れは眞實であるか、南柯」
「恐れ入りました」
「して其の事は誰より聞きしか」

「早朝より其のことにつき、御殿は大騒ぎでございます」
「昨夜、太子のお側には誰が侍したのか」
「ヤユダラ皇后様でございます」
「然らば、ヤユダラに直ぐに此所へと申せ」
「畏まりました」
南柯は、ヤユダラ皇后に此の由を告げて、共に〳〵月の方の前に來た。
「ヤユダラよ」
「ハイ」
「悉達太子の姿が見えぬと云ふが、眞實であるか」
「ハイ」
南柯といふ女は、世に稀なる悪婦である。豫て、提婆と心を合せ、カピラ城内に仕へて居るので、事あれかしと思つたから、月の方に取り入つて居るのを幸ひに、忠義

無二の優陀夷夫婦を始め、ヤユダラ皇后を亡きものにせんと企だて居るのである。

今しも月の方が、ヤユダラ皇后を招びて、悉達太子の失踪につき、前後の模様を聞かんとするので、何か捕へんとして其の席に連なつた。

「太子が出たのは何時頃であつたのか」

「妾は、少しも存じません」

「お側に居りながら、少しも知らぬとは」

「不都合で御座りました」

「たゝ不都合ばかりでは後ろ隠し、眞實に明されよ」

「如何によく察人りたりとて、餘りに人を馬鹿にした答へではないか」

と、月の方は、やゝ氣色ばんで、聲を荒らげた。ヤユダラ皇后も、母君のお心を損じてはと思ひ、終にありし次第を委しく話した。

ヤユダラ皇后は、又たも其の時のことを思ひ浮べ、人目も耻ず、涙を流して泣き沈

んで居た。

月の方は、心の内に不愍に思ひ、

「オ、、然うであつたか、何れ又た問ふことも有う」

と云つて奥殿へ入らんとした。南柯は之れを控へて、

「我が君様」

「なんぢや」

「何うも不思議でなりませぬ」

「不思議とは」

「妾は少し、ヤユダラ皇后様にお尋ねいたしたう御座います」

「何であるぞ」

「太子様を、お止め申さうとすれば、たとひ女とは云ひながら、お止め申されない事は有りますまい、然るに只お行衛が不明となつたゝけでは、妾の腑に落ちませぬ」

「尤もである」

「人と申しまするものは、表面と内心とは違ひまするもの、妾が知つて居りますだけでも、ヤユダラ皇后様の平素のお身持ち、殊によつたら、忠義を装はう優陀夷夫婦と心を合せ、もしや太子様を亡きものに致されたのでは有るまいかと存じまする」

「何といやる南柯」

「でなければ、那の多くの番人を、優陀夷様の手で付け置きながら、お行衛が知れぬなどゝは云はれぬ事と存じまする、此の點を能々御考へ遊ばされまするやう願ひ上げまする」

「して其の方が知つて居るとは如何なる事であるか」

「そは、申し上げるも、畏れ多き事なれど、ヤユダラ皇后には、太子様の目を掠すめ仇し男の種を宿し居らるゝとか聞きました」

「それには、確かなる證據でもあつてのことか」

「ハイ、人の口に噂せらるゝ事、まさか證據のない事は有りますまい」

と南柯が、巧言令色、罪なき我が身を讒するにも餘りであると、今まで泣き沈みて居たヤユダラ皇后は、

「何を云ふのぢや南柯、さやうの事、妾の身に更に覺えはない、證據あらばこゝに示せよ」

と怒りの顏色を現はして、ハッタと南柯を睨んだ。

南柯は、思はずギョッとしたが、更に之には答へやうともせず、たゞ嫉妬深き月の方に向ひ、

「お家無二の忠義ものと、表面は飾り居りまするが、聞けば優陀夷夫婦のもの等は、難陀太子をカピラ城の君に立てんとの企てある由、其の裏には如何なる手段を施こし居るかも知れませぬ、決して御油斷は出來ません、兎に角事の分明となりまする内はヤユダラ皇后様は、南柯にお預け下さり、淨飯王に申し上げ、優陀夷の吟味をお急ぎ

下されば、必らず動かぬ證據が手に入りませう、少しの暇も證據をなくする恐れがありまする」

と云つた。

月の方は、いろ〳〵と心配して居る時である、太子の行衛不明は、南柯の云ふごとく、或は不慮の難に逢たのではあるまいか、と遂に其の甘言に迷はされ、

「ヤユダラ皇后の身は、しばらく其の方に任せ置く」

と云つて、其のまゝ御殿に往き、淨飯王の前に出で、南柯が云ひし次第を言上して一時も早く優陀夷夫婦を捕へんことを願はれた。

淨飯王は、優陀夷夫婦に限り、右樣の不都合ありとは信じられなかつた。けれど噂さのある上は、之を調べない譯にも往かないので、早速夫婦のものを召し寄せた。

優陀夷夫婦は、急の使、何事ならんかと、淨飯王の前に出仕した。スルと王の前には、月の方のみならず、南柯も控へて居た。

「優陀夷夫婦のものよ」

「ハッ」

「汝等夫婦の忠義なることは、予がよく見込み居る所である、汝等に限りて斯る不都合の行爲があらうとは思はない、が噂が有つて見れば、聞き捨てにも成らん、何事も包まず申し立てるやうに致せ」

「畏まりました」

「其の方は太子の在所を知つて居ると云ふものがあるが何うか」

「恐れながら申し上げます、人々太子樣のお行衛に心配いたし居りまする折柄、之を知つて匿すいはれが御座りませぬ」

「尤もである」

「畏れなから申し上げます」

「なんぢや」
「差し出がましく存じまするが、優陀夷様に尋ねたき儀が御座りますれば、御許しを願ひます」
「なんぢや」
「優陀夷さまは、自から御指圖なさつて諸門を固められて居たので御座いませう」
「夫れに違ひは有ません」
「さう致しますれば、太子様が城門をお出ましにならなかつた事は明かでございませう、あなた様がお役目を疎かに成さるやうなお方で有ませんから」
「各門々の番人等を取り調べましたが、お出ましには成らなかつたと、異口同音に申して居ります」
「太子様は城門をお出ましにならず、其の姿は見えないのです、そして太子様は何者にか殺され遊ばされたと云ふ噂があるのです、此れには何とお答へなさいます」

「今更如何なる嫌疑を蒙りたりとて云ひ解くことは出來ません、實に其の罪は逃れ難く存じ居ります、此の上は太子様が、天に翔り地に潜り遊ばすとも、岐度尋ね出しますし、今暫らく御猶豫を願ひます」
「優陀夷様のごとき忠臣にして、太子様を弑逆なさるなどゝは、そりやア噂さに止まる事で、妄とて事實なりとは信じませんけれど已に噂があつて、太子様附の人々はことゝく御遠慮申し上げて居る折柄、貴方方御夫婦二人も、御遠慮お謹みあるが至當かと存じまする」
「尤もなる仰せ、然る噂さありとは、今まで存ぜざりしが、誠に噂さありとせば、固より蟄居謹慎いたし居るでござらう」
と、優陀夷は身に暗き所はなけれど、南柯の言葉に抗すべき反證もないので、止むなく二人のものは、しほ〳〵と御前を下り、太子の行衛分明する迄は、門を閉ぢて謹慎することにした。

南柯は、意のごとく運んだので、大いに悅び優陀夷の出仕せざる內に一時も早くヤユダラを亡きものにせんと、頻りに奸計を廻らした。

ヤユダラ皇后は、其の身の疑ひ、優陀夷の嫌疑を晴すには、太子の遺書を提出するに若ことはない、と思つて隈なく之を探し求めた、けれど不思議にも、何時の間にか遺書は紛失して、遂に見出すことが出來なかつた。

南柯は、意のごとく優陀夷を退ぞけることが出來た。が南柯は提婆太子のために賴まれ、ヤユダラ皇后を盜み出し、カピラ國を提婆太子の支配に歸する大任があるのである。

此の南柯なる女は、提婆太子の乳母であつたが、容姿も人並に勝れ、辯舌爽かにして、よく人の氣をとる事に妙を得て居た、のみならず天資豪膽にして、男子も及ばぬほどの女丈夫であつたので、提婆は此の女の素性を包んでカピラ城に入り込ませた。

所が、南柯の優れたる氣性は、よく多くの官女を威服せしめ、其の辯舌は月の方に

信用せられて、遂に宮中のことは、何一ッ意の如く成ざるはない、といふやうな勢力を得たのだ。

提婆太子が、カピラ城王たらんとする希望は前にも述べたごとくであるが、南柯は其の望みを達せしむるのが、重なる責任であると同時に、又たヤユダラ皇后を盜み出すべく、提婆から嚴命を受けたのである。

此の依賴あるがために、悉達太子の失踪を幸ひに、先づ第一に優陀夷夫婦の邪魔物を除いた。そして南柯は機を伺つて、ヤユダラを說いて城外に誘ひ出さんとした。

ヤユダラは、一室に監禁され、アバラといふ忠義な侍女が、たゞ一人出入りするのみで、誰あつて慰さめるものはなかつた。

或る夜ヤユダラは、一人思案に暮れて居ると、二十一二の男が訪ねて來た、女ですら其の出入りを嚴しくされて居るのである。それに男の姿が見えたので、ヤユダラは敵か味方かと、先づ其の胸を轟かした。

「恐れながら申し上げます」
「誰ぢや」
「私は、アバラの兄でございます、貴女さまにお目に掛り、内々申しあげんと、毎夜人目を忍んで、今夜でもう十日になりますする」
「して何の用があるか」
「貴女様が南柯といふ悪人に苦しめられて、座敷牢に押し込められ居らつしやることを聞きました」
「フム」
「それに就き、此のことを悉達太子様に申し上げ、其の必を謝がへして、一時も早くカピラ城にお歸り下さるやうに、お願ひいたしませうと思ひまして」
「よくマナ」
「ダンドクセンで太子様にお目にかゝり、残らず聞きましたことを、洩らず太子様に

申し上げました」
「それではお前は、悉達太子様にお逢ひしたのか」
「ハイ、お目にかゝつて、いろ〳〵とお歸り下さるやうにお願ひいたしましたが、太子様は、一旦決心したことだから、歸る事は相成ちんと仰しやり、何うしても私のお願ひを取り上げて下さりません」
「さうであつたか、マナ能く訪ねて呉れました、お前の忠義は忘れぬぞ」
「恐れ入りました」
「お前が、お逢ひ申したときには、太子様は何うして居らしつたか」
「太子様は、一心に御勉強なさつて居られました」
「アノ淋しい所かい」
「ハイ、モウ山の奥の又た奥で、極々淋しい所でございます」
「太子様は、お一人で居らしたか、夫れとも他のお弟子たちと、大勢であつたか」

「太子様は、お一人で、外には誰れもお居でに成ません」
「太子様は、妾が困つて居ることを御聞き成され、何と仰せに成りましたぞ、早く聞かして呉れよ」
「太子様は、貴女様が斯んな目にお逢ひ成らうとは、夢にも思ふて居られなかつたのです」
「さうで有う」
「それで、私の申し上げたことをお聞き成され、涙を流して、可哀さうである、一度逢つて遣りたいが其のことも叶はず不憐のものである、と仰しやいまして、衣を顔にあてゝ、暫らくはお言葉も御座いませんでした」
ヤユダラは、太子の身の上を案じて、此のことのみを思ひつめて居たので、今其の音信を聞き、身の安危を忘れ、熱心に耳を傾むけて、時刻の移るを覺えなかつた。
「妾とて同じ思ひで、一目太子様に逢ひたいとは、少しの間も忘れぬ願ひであるが、

それも思ふに任せず、お尋ね申した所で、お逢下さるやうな事はあるまいのう」
「貴女様の御心は、定めて然うと思ひましたので、お悦び遊ばしませ、太子様は、私がいろ〳〵お願ひ申した末、やつとの事で一目お逢ひ下さるやうに御承諾成さつて下さいました」
「何といやる、太子様にはお逢ひ下さると」
「ハイ」
「それは眞實であるか」
「眞實で御座いますとも、私が直々にお願ひいたしましたので、決して間違ひは御座いません」
「して　太子様の居らつしやる、ダンドクセンといふ所までは、餘程遠いで有らうのう」
「左様でございます、道は隨分近くは有りませんが、お駕に召しますれば、何の造作

は御座いません」

「とは云へ、妾の身體は儘ならぬ身體である、籠の鳥も異りはない、お目に掛りたいは山々であるが、一足だも此の室を出る事は出來ない、ア、思ふまい〳〵」

「其の御心配は御座いませぬ」

「何と云やる」

「當ならば、いざ知らず、今夜に限り、其の御心配はありません」

「ナゼかのふ」

「されば、今夜は、貴女樣を亡きものにせんと企だて居りまする、惡女南柯めは居りませぬ」

「南柯は居ないと」

「ハイ、今夜は一度も檢べには參りますまい」

「なるほど、さう聞けば、一時間ごとに檢べに來る、アノ南柯が今夜は姿を見せない

が、此れには何か仔細が有るのか」

「ハイ、實は貴女樣に、お目に掛りたいと思ひ、いろ〳〵苦心いたしましたが、那の南柯めの油斷なき儘、とう〳〵今日までも、お逢ひする事が出來ませんので、實は僞手紙を以つて、南柯の母が急病だと知せましたので、南柯は忙てゝ城内を出て往きました。

「そんな事をして、又た南柯が歸つたら、何んなに叱ることやら分らぬ、誰の指圖でそんな事をした、斯ういふ中にも南柯が歸り來るかも知れない、見付けられぬを幸ひ寸時も早く此所を立てよ」

「いえ〳〵其の御心配は要りませぬ、此の事は妹アバラと相談いたした事で御座います、よし詐言と知れて、直ぐに歸つて來ましても、まだ〳〵歸るには間が御座いま

「アバラと相談したのか」

「ハイ」

「アバラも、妾に一口の相談もなく、そんな無法のことをして、此の後を何とする意中であらう」

「御心配なさいますな、タトヒ妹と私とが、生命を奪るゝ事が有りましても、貴女様に御迷惑はかけません」

「ぢやと云ふて、アバラが死んだら、妾は誰を頼りに生き長らへやうぞ、そんなら然うと、前に知らして呉れゝば、又考へもあつたらうに」

「此れと云ふのも、貴女様を思ふゆゑ決して御心配は御座りませぬ、併しアバラも待ちくたびれ居りませう、貴女様には、少しも早く此所を抜け、太子様にお逢ひ下されませ」

「アバラは何れに居るのぢや」

「アバラは貴女様のお駕を用意して、威貫門の側で待つて居りまする、其のお駕へお

乗りに成りますれば、私とアバラとが守護いたし、太子様のお居でになる、ダンドクセンへお伴いたします」

「アバラは其んな手筈まで、モウして居るのかい」

「ハイ、貴女様には少しも早く、委細はアバラよりお聞き下さい」

といふ折柄、廊下を歩む足音が微に聞えた。

ヤユダラは、悉達太子の音信を聞き、且つ忠義なるアバラが駕籠まで雇ひ來たつて自分を太子の許に導かんと云ふことを聞き、其の心は、

一、今宮城を逃れたらんには、後日南柯のために如何なる難題を持ち出さるゝやも計りがたきこと。

二、太子に逢ふことが出來れば、其の身は死するも厭はず、況んや南柯の難題など憂慮する場合でない、又た太子に逢へば、南柯の難題は自然に消えて了ふことに成るかもしれない。

との二つに別れた。遂に第二の心に決せんとするの折柄、俄に足音を聞きつけた。

「足音が致しますする」

「さうであるのよ」

「サア、見付けられぬ内に、一時も早く……」

と急き立てられ、ヤユダラは直ちに身を起して、其の男の後に從がふた。暗夜のこと、一寸先きも見えず、男はヤユダラの手を取り、一目散に駈け出した。暫らくすると威貴門に着いた、其所に一挺の駕籠が待つて居た、が、アバラの姿は聞えなかつた。

ヤユダラは怪む間もなく、直ちに駕籠の中に押し込められた、駕籠は四人の肩に、何れともなく立ち去つた。

南柯は、潜かに廊下に忍び。ヤユダラの樣子を伺つて居たが、首尾よく自分の計略通りに、ヤユダラを提婆の許に誘ひ出す事が出來たので、大いに悦んで、自分の室に

歸らんとする、計らずもアバラに出逢つた。

アバラは、南柯のために使はれて、今しも其の用を済し、南柯の室に至りたるに、其の室には南柯あらざりしため、主人ヤユダラの身を思ふて、其の室に來らんとしてゐた二人は出逢つたのである。

「まい所でお目にかゝりました」

「御苦勞〳〵」

「只今、お部屋まで伺ひましたが、御姿を見受けませんので、後ほどお伺ひ致さうと思ふて居りましたが、おん伸し付けの通り、必らずお調に參せますやう堅く引き受けましたし」

「さうであつたか、ヤル〳〵其れで安心した」

と、二人は確かばかりの言葉を取り換せ、南柯は自分の部屋へ、アバラはヤユダラの部屋に、と互ひに立ち別れた。

アバラは、ヤユダラの室に歸つて見ると、ヤユダラは居ない、斯は不思議と諸々方方を探し廻したが、遂に其の姿は見えなかつた。

アバラの驚きは一方でなかつた、が素より利發のアバラである、已にヤユダラの姿の知れざる上は、其の身は自殺するより外はない。けれど、

一、南柯は、多くの召使ひがあるにも拘はらず、今夜に限り二度も三度も、引き續いて自分を使ひに出したこと。

二、自分が歸り來りし時に、ヤユダラの室より出で來りし南柯に出逢ひたること。

三、南柯と別れて、ヤユダラの室まで來るのは、實に僅かの時間である、其の僅かなる時間の間に、ヤユダラの姿の消える暇はない。

四、左すれば、南柯もヤユダラの居ないことは知つて居たに違ひない、にも拘はらず南柯は、其れに就いて何等も語らなかつたこと。

などの疑問は必らず何等かの連鎖がありさうだ、今死んで了へば、此れ等の疑ひは

消えて了ふ、兎に角此れ等の疑問を優陀夷様に告げて、其の後に死するも活るもお指圖に從がはう、と決心したアバラは、急ぎ優陀夷の許に駈けつけた。

「アバラどのか」

「ハイ」

「此の夜中に何事で來られた、ヤユダラ様のおん身の上、若しや變つた事が有つての事か」

「ハイ、一大事が」

「一大事とは」

「云々斯様で御座ります」

「サラ容易ならざる一大事、死ぬことならぬ暫し待て」

と優陀夷は、押取り刀で立ち上つた。

優陀夷は、ヤユダラの行衛が知れないので、自分は謹慎中の身體であることも打ち

忘れ、押取り刀で御殿へ出仕せんとした。優陀夷の妻は新くと見て、

「もし我が夫」

「なんぢや」

「何れへお越しに成りまする」

「何れと云ふて知れたこと、淨飯王様に申し上げ、ヤユダラ様の御行衛を、一時も早く探さねばならぬ」

「それは、暫らくお待ちあれ」

「待てとは」

「奸智に拔目なき那の南柯、如何なる企みが有るかも知れませぬ」

「ぢやと云つて、ヤユダラ様の身の上、一時の猶豫も出來ぬ」

「でも又た如何なる企みをして、此の上我等を亡きものにせん考へかも知れませぬ」

「たとひ此の身を粉つるとも、此の一大事を此の儘になし置くことが出來やうか」

と留むる妻を突きのけて、已に駈け出さんとする折柄、右梵兒は飛ぶがごとくに走せ來り、

「我が君様」

「右梵兒か」

「一大事で御座ります」

「一大事とは」

「ヤユダラ様を駕籠に押し込め、城外に連れ出さんとするものが有ました」

「よく聞かして呉れた、右梵兒、急ぎて其の駕籠を止めよ、後より人數を連れて、此の優陀夷が向ふぞ、急げ、早く急げ」

「マア〳〵暫らく」

「暫らくとは」

「ア、、苦しい……、我が君様、恐れ入りますが、水を〳〵」

アバラは、右梵兒の息苦しき樣子を見て、早くも水を汲み來り、杓の儘に右梵兒に與へた。

「ヤユダラ樣は奪ひ返しました」

「ヤユダラ樣は奪ひ返したと、ソシてヤユダラ樣は何れに居らるゝぞ」

「ヤユダラ樣は、威貫門の番人に預け置きました。最早御心配は御座りませぬ」

「それは手柄であつた、そして連れ出した男は如何致した、又た其の時の狀態は何うであつたか、委しく話して聞かせて呉れ」

「心得ました。私は仰せを蒙り、何かと心を配つて居りました」

「フム」

「丁度威貫門近くへ參りますると、微かに塀の側に人影がありました、ハテ今時分に此所等を忍び歩るく奴、曲者に極つたりと、息を殺して伺ひ居るとも知らず、曲者は一人の女を促がして、其所に待ち居る駕籠に乘せんとする、女はアバラは居ぬか、アバラよと呼ぶにも構はず、曲者は女を無理に駕籠に押し込めて、急げものどもと駈け出しました」

「フム」

「其の女の聲が、ヤユダラ樣に違ひございません、サテも不思議と、それなるはヤユダラ樣に在さずやと呼ぶや、曲者等は一層足を早めて駈け出しました」

「フム〳〵」

「後より追んと致しましたが、若し取り逃しては存じ、腰なる一刀を引き拔き、曲者目蒐て投げつけ、此れで曲者は逃げる氣遣ひはなしと、一目散に駕籠を追駈け、已に手を駕籠にかけんとする時、何れより來りしか、二三十人のものどもが、右梵兒目蒐て斬りつけ來り、心は焦れど此れ等の邪魔者に、駕籠は遙か彼方に駈け拔けました」

「それから何ういたした」

「取り逃がしてなるものかと、腰なる差し添を引き拔き、駕籠を目がけて投げつけま

すと、刀は誤またず、後ろの駕籠舁二人の足を拂ひ、駕籠は地上に轉りかへつたので
ヤレ嬉しや、刀はなくとも二十三十の蛆虫奴等、片つ端より擲り倒し、蹶散して、漸
やく曲者を追ひ拂ひ、今や他の曲者等が、代りて駕籠を舁んとする所へ駈けつけ、駕
籠に手を掛け引き戻さんと致しました」

「フム」

「所へ又たも曲者等が五六十人、駈けつけましたから、命が要らずば右梵兒の手に渡
せと叫ぶや、卓怯なる曲者等は、我が名を聞いて手出しするもの一人もなく、皆なコ
ソコソと逃げ散りました」

「何時もながら、其の方の勇氣は感ずるに餘りある、してヤユダラ様にはお怪我はな
かつたか」

「靜かに駕籠の戸を開き見ますれば、案に違はずヤユダラ様、少しの御怪我もなく、
無事に居らせられたので、ヤレ嬉しやと思ふと、ヤユダラ様は、アバラを助けやれ、

アバラが曲者等に連れられた、と仰しやいましたけれど、ヤユダラ様を捨て置いて、
アバラ様を助ける譯には往かず、兎に角ヤユダラ様をお伴いたし、我が君様のお指圖
を受けんものと息急歸つて見れば、不思議やアバラ様は此所にお出になりまする、誠
に合點が往きません」

「なるほど、合點往かぬ節もある、して最初にヤユダラ様を連だした曲者は如何いた
した」

「その曲者は」

「フム」

「殘念のことには、死んで了ひました」

「ナニ、曲者は死んだと申すか」

「ハイ、眞逆死ぬほどの事もあるまいと思ひましたが、曲者等を追ひ散す内に、ッイ
手後れと相なり、歸りがけには息の根は止つて居りました」

「其れは殘念の事をいたした、いろ〳〵手掛りに相成つたものを」
と優陀夷は、暫ら〳〵歎息して居たが、已う死んだものは仕方はない、此の上は一時も早く〳〵ヤユダラ樣をお連れ申せよ、といふので右梵兒は早速ヤユダラを優陀夷の家へ導いた。

ヤユダラは、優陀夷の家へ來ると、今まで其の行衛について心配して居たアバラを見て、

「アバラ、お前も無事であつたか」

「ハイ、妾は何の變りも御座いません、南柯樣のお使ひを濟し、お室へ參つて見ますると、貴女樣のお姿が見えませんので、何んなに心配いたしましたらう、お察し下さいませ」

「なんと云やる、お前は妾が出た後で妾の室へ來たと」

「ハイ」

「さは、お前は、お前の兄さんが妾を迎ひに來たことは知らないのか」

「那の私の兄で御座いますと」

「お前の兄さんだといつて、お前が駕籠を雇つて待つて居るから、といつて迎ひに來ました」

「マア、そんな事が、妾は少しも存じません」

「お前が少しも知ない」

「ハイ、妾には兄は在りません」

「それでは矢張曲者が、お前の兄ぢやと詐つて來たのか」

「其の樣な事が有りますれば、妾がお伴いたします筈、お顏も御存じなきものに、ナぜそんなに御心をお許し成されました」

「妾としたことが、思慮なき事をして、皆んなに心配をさせたのう」

「コレも矢張、南柯の惡企でございませう」

「ヤレ〳〵怖いことであつた」
「仇の多い今時、御油斷なさつて下さいますな、我が君樣」
「これからは心附まするぞ」
と話して居る內に、優陀夷は何か心に決したらしく、
「右梵兒〳〵」
と呼んだ。
右梵兒は、
「ハイ」
と答へて、優陀夷の前へ手を突いた。優陀夷は聲を潛めて、
「さて右梵兒」
「ハイ」
「お前も、今聞く通りの始末である、此等の惡企は、みな南柯めの指金に違ひない」

「左樣で御座いますとも」
「此の上は、一時も猶豫はならん、如何にもして南柯の素性を探り吳れよ必らず人に知られぬやう、少しも早く〳〵」
「畏まりました」
優陀夷は、右梵兒に委細を云ひ含め、南柯の素性を取り調べさせ、其の身は直ちに淨飯王の前に出で、
「我が君樣」
「優陀夷であるか、悉達の行衞は相分つたか」
「未だ御行衞知れ申さず、人を四方に遣はせましたが、まだ一人も歸り來らず、優陀夷心痛いたし居る折柄、又た〳〵一大事が出來いたしました」
「一大事とは」
「實は云々で御座います」

「ソハ容易ならざる事であるのう」
「これ全たく南柯の所爲かと思はれます」
「夫れには、何か確とした證據でもあるか」
「別に證據と申す譯は御座りませぬが、アバラどのが斯々の疑ひを抱いて居りまする
が、此れ動かぬことにて、ヤユダラ樣を誘ひ出したことゝ必らず連鎖のあるやうに思
ひます、較度御取調べを願ひまする」
「それのみなれば、暫らく差し控え居りて、彼女に油斷をさせ、尙ほ此の上如何なる
ことをするか、機を見て動かぬ證據を押さえるが得策であらうぞ」
「左樣でございます、就きましては昨夜首尾よく曲者を手に捕りましたが、不幸其の
者は死んで了ひました、誠に殘念に存じます」
「それは惜きことを致した、南柯は一筋縄では追へぬ惡徒、先づ動かぬ證據を押える
が肝要であるぞ」

「畏まりました」
と話して居る所へ、月の方は南柯を從へて入り來り、淨飯王の側に座をしめた。
南柯は、曾てヤユダラを誘ひ出したので、仕濟したりと悅んだ甲斐もなく、ヤユダ
ラは右梵兒の爲めに取り返されたと聞き、一方ならず心配した、最早我が惡運も此れ
までである、此の儘にして居れば其の身が危うい、と思つて早くも城内を拔け出さん
と決心した。
斯る所へ、侍女が馳せ來り、
「我が君樣」
「なんぢや」
「昨夜曲者が忍び入り、ヤユダラ樣を盜み出さんとし、曲者は右梵兒樣の手にかゝり
斬り殺されましたとの事でございます」
「ナニ、曲者は斬り殺された」

「ハイ」
「全たく斬り殺されたに違ひないか」
「ハイ」
「岐度間違ひないか」
「確かに違ひございませぬ」
「シテ、お前は、其の殺されたものを見て參りしか」
「イエ、妾は見ませんが、其のやうに話して居られました」
「話しで實否が分るものか」
「では、よく見屆け參りませうか」
「如何にも實否を正して參れ、曲者の年は幾つ、衣服は何、顏は斯うと能々調べて來やれ」
「畏まりました」

「斯んな事は、妾の關係することでない、人に知られぬやうにいたせ」
「心得ました」
「急いで參れ」
「ハイ」
と云つて侍女は立ち去つた。南柯は此の報知せを聞いて、飛び立つばかりに悅んだ曲者にして死んだる上は、禍ひを轉じて福となすことも出來やう、まだ〳〵妾の運は盡ないかと、密かに七苦八慮、此の出來事を利用して、優陀夷夫婦のものを陷擠せんと、工風をこらして居た。
スルと間もなく侍女は歸つて來た。
「我が君樣」
「如何であつた」
「眞實殺されたに相違ございません、年の頃は、二十一二、白の金巾を身に纏ひ瓜實

顔の鼻高き、色は光るほど黒い美男子で御座りました」

此れを聞いた南柯は、其の曲者が、死んで呉れゝば宜いがと待ち構へて居たと見え仕濟したりと喜んで、其の儘月の方の前に出で、そして優陀夷夫婦とヤユダラとを讒し、月の方を説すゝめ、淨飯王に訴へて、アハよくば優陀夷夫婦を亡きものにせんと、女に似げなき大膽なることを企らみ、自分の罪惡を免かるゝのみならず、其の罪を人に嫁せんとして、斯くは淨飯王の前に來たのである。

優陀夷は、又た厭な女が出て來た、如何なることを企なんで居るかも知れない、と思ふて針の蓆に座つた心地がした。

月の方は、

「我が君樣に申し上げたきことが御座いまして參りましたが、幸ひ優陀夷も居て、誠に好い都合であつた、南柯お前から委しく申し上げて呉れ」

と云つた。南柯は、淨飯王に一禮をして、

「畏れながら申し上げます」

「なんぢや」

「昨夜遲く、ヤユダラ樣の室へ伺はんと致しましたる所、ふと男女二人の話し聲が耳に入りました」

「ナニ、男女二人の話し聲が聞えたと申すか」

「ハイ、斯る所に男の來る譯はない、必らず曲者に違ひない、と思ひまして直に聲をかけんといたしましたが、女一人で聲を立てゝ、曲者を取逃すやうな事ありては成らず、又たお話しは如何なることであらう、豫て噂さある密夫などが忍び入りしにあらずやと思ひましたので、ソッと身を忍ばせて、濟ぬことながら、お家の一大事、聞き捨てならじと耳を澄せました」

「フム」

「所が、其の話しこそ、推察のごとく驚くべき、お家の一大事でございました」

「一大事とは」

「ヤユダラ様のお生みに成りましたのは、全たく悉達太子様のお子様ではなく、忍び居りし密夫の子にて、其の子にカピラ城王の位を繼せ、畏れ多くも陛下を始め、難陀太子様などを亡きものにせんとの密談で御座いました」

「異なことを申すが、夫れには確かなる證據があつてのことか」

「南柯どのには、怪しからぬ事を云はれまするな」

「怪しからぬとは、優陀夷様、貴下も其の黨類では有りませんか」

「何と云はるゝ」

「優陀夷様、そんなに怖い顔をしなくとも宜でせう、惡い事をして、夫れが知れずに濟むと思つて居らつしやるのが第一間違ひで御座います、妾は昨夜殘らず祕密を聞き取りました」

「優陀夷身に取りて一ッの祕密あることなし、あらば云つて聞かして貰ひませう」

「仰せなくとも申し上げます、太子様をお殺しなさつたのも、全たくおん身等の企みで有ませうがな」

「拙者が」

「如何にも、尙ほ又た難陀太子様をも殺害する企みをして居られた事も聞きました」

「何を證據に、さやうな事を仰せになる、南柯どの」

「證據は、妾が直々に聞き取りました、妾は男女二人の話しを聞き、容易ならざる事と思ひ、密かに引き返へして、心利きたる家來をつれ、其の曲者を捕へんと、ヤユダラ様の室に至れば、早くも妾に密談を聞かれしを悟り、二人とも其の姿を隱して、貴下の家に逃げ込まれたでせう」

「夫れは、飛んでもない事を云はるゝ、ヤユダラ様は我が家に居らるゝも、實は云々でお救ひ申したので、我が身に決して暗き所は御座らぬ」

「夫れほど貴下方が潔白なお方なれば、ナゼ其の曲者を殺して、肝心な證據を隱滅さ

せました」

「曲者は決して殺しは致さぬ、前にも申し上げたごとく、右梵兒が過まつて殺したのでござる」

「そんな一時逃れの口上は、お止しなされよ」

「何で一時逃れでござる、全たく其れに相違ござらぬ」

「優陀夷樣、貴下は口上手に仰しやるが、屹度それに違ひ有りませんか」

「もとより」

「夫れなれば、早く右梵兒とやらをお呼び寄せ下さい、妾が訊ねて見たいことがあります」

「右梵兒は、折あしく他行して居りませぬ」

「貴下は、右梵兒までの妾を隱させて了つたのですか」

南柯は、口に任せて喋舌りたて、遂に優陀夷の口を禁がせ、ヤユダラを司法官の手

に委し、其の罪を糺明することにした。

ヤユダラは、密夫の寃罪を雪ぐことが出來なかつたので、其の時代の國法として、ヤユダラは、遂に斬罪に處せらるゝことになつた。

いよ〳〵判決が確定したので、アバラの歎きは一通りではなかつた、何とかして息ある內に、悉達太子に此の事をお知せ申さんと、女心の一心に、岩をも通さん勢ひにて、或る夜密かにヤユダラを訪ねた。

「我が君樣」

「オヽ、お前はアバラ」

「ハイお懷かしう存じます」

「お前は何うして斯んな所に」

「我が君樣に一目お逢ひ申したさに、人目を忍んで參りました」

「マア、よく來て呉れました」

「我が君様には、お情けないことに成りまして、定めて御殘念に思召すことでございませう」

「何うした因果か、罪なき罪に陷ちねばならぬ、察して呉りやれ、のうアバラよ」

「タトヒ罪は極りましても、妾は之れより悉達太子様をお尋ね申して、岐度我が君様の無實の罪を雪ぎます、必らず心配せずに居て下さりませ」

「頼りにするものは、ほんにお前ばかり、嬉しく思ふぞ、アバラよ」

「是非明日はダンドクセンとやらへ發足いたしまする考へ、其の事を申し上げんために、虎穴に入る思ひして參りました」

「それでは、いよ〳〵明日は發足するのか」

「ハイ、最早や我が君様に侍かれぬ妾の身體、此の時機を外しては、再び悉達太子様をお尋ね申すことは出来ませんと思ひまして」

「道中氣をつけて、病らはぬやうにして呉れよ」

「有り難うございます」

「今別れるのは辛いやうだが、一日も早く歸つて呉りやれ、それを樂しみに待つて居ますぞ」

「ハイ、では斯うして居ても盡きせぬ思ひ、心を鬼にしてお別れ申しませう、さらばで御座います」

「若しや見附けられては一大事少しも早く」

「心得ました、我が君様には、心丈夫に妾の歸りをお待ち下されまするやう偏ら願ひ上げまする」

と、アバラは心を勵まして、ヤユダラに別れ、優陀夷夫婦に暇乞ひして、心強くも其の身一人が、知らぬ旅路をダンドクセンに出發した。

アバラは、多くの日數を費やし、ダンドクセンに到着した、が悉達太子の住所は容易に知る事が出來なかつた。アバラは三日の間、足に任せて彼方此方と探し廻つたが

遂に尋ね捲んで、暫し足を休めて居ると、遙かに繁茂せる森を見つけた。

折から盛夏の頃とて、アバラは森を見つけて、飛び立つほどに悅び、疲れた足をひきづりつゝ、森の方へと急いだのである。

アバラが森と見たのは、椰子樹の群生したのであつた。此の椰子樹は、印度群島にあつては、一日も欠くべからざる、一種有様なる植物である。

椰子樹は、此れ等の地方にあつては、熱帶地方のことゝて、其の枝葉の繁茂はトテも我國などに居ては想像は出來ない、旅人等は此の樹を望んで、其の下に集まるのみならず、島民は多く其の中に、小さな小屋を建てゝ、其の住家として居るのである。

印度のゼーロン島、即ち釋迦が生れた地方には、海岸に沿ふて遠く十二三里（我が國の里數、普通我が國に行なはれる、釋迦傳には、支那人の手を經たものを轉譯したものが多いので、支那里數即ち我が六町を一里としたものである、混じやすきが爲に、一寸斷はつて置く）に達し、現に外國人によつて、此の森林から驚くべき產物を

生出されて居ることは、讀者もよく知つて居られる事だと思ふ。

椰子樹は、我が國には印度のごときものは一本もないので、或ひは單に椰子樹といつたばかりでは何の事だか、意味の分らぬ人があるかも知れないから、こゝに其の大要を記さう。

印度人は、此の樹の實から酒も造れば酢も造る、又た此の實は我が日本人に於ける米と同じく、彼等平素の常食である。

近來は、此の樹木の纖維からして、船舶用網具を製し、油をとり紙を製するやうになつた。實に現今に於いて、印度人が此の樹から受ける恩惠は、一朝にして書き盡すことは出來ないが、釋迦時代でも印度人は此の樹によつて生活して居たのである。

此の樹が生長して、枝葉が繁茂するときは、恰かも大きな圓柱を突きたてたごとく木の葉は高く聳へ、太陽の光線だも洩さないほど繁るのだ。

此の木の花は、誠に美麗にして、澤山の實を結び、其の實は恰かも球燈を掛けたご

とく、緑は滴らんとする許なので、盛夏の候にありては、實に旅人の樂天地である。

其の生長の度は、熱帶地だけに、非常に速やかにして、其の幹の長さは百尺の長さに達し、其の直徑は二尺を越えるものがある。

土人等は、此の木を柱、梁、船體などに用ひ、又た中の空洞なるものは、之れを樋となし、其の根は編て箕を作り、又た衣服にも製へる。

其の葉は、象の必要食物になり、葉の巾が三尺以上になり、長さが十四五尺に及ぶといふのだから、如何に著るしく此の樹が成長するかと云ふ事が想像が出來やう。

此の葉から日傘を製し、いろ〳〵の細工物を造り、卷いて松明とし、箒も此の葉により、石鹸も此れから製造へるのだ。

其の果實の形は。卵形と三角形との二種があるが、其の大さは人の頭位ある、果實を搾り乳白の汁を取つて、强壯劑として之れを飲用し、或は此の實と石灰とを混じ船舶の蟲類から犯される部分を塗り其の腐蝕をふせぐのである。

其の他果實よりは一種の油類が製造せられる、けれど其の臭氣が非常に惡いので、最初は歐米人間に賞用されなかつたが、近來になつては、工藝界にも美術界にも欠くべからざる必要品となつた。そして油を取去りたる粕は動物の飼料とし、又た田畑の肥料として一般に歡迎せられて居る。

椰子樹の柔かにして紅銅色の纖維よりは、華麗であつて精巧なる花氈又たは種々の織物を製し、その硬い部分の纖維からは、繩を製し麻の代用として其の用法は極めて廣い。

飲料として有名なる椰子酒は、椰子の花から製せられ、其の質は滋養分に富みたる上、風味も又た一般人類に歡ばれ、又た果實よりも別に酒、酢などが製せられて居る

此の木と印度人の關係は、我國の人々と米との關係よりも、一層有益である。

印度人は非常に此の木を尊敬し、彼の釋迦が生れたセーロン島の風習に土人に子供が生れると、此の樹を植つけ其の生長を樂しむことが傳はつて居る。彼等は此の樹が

年々に生長し行くに從ひ、その木輪が增加するから、其の子の年を數へる年暦として居るのである。

斯んな重寶な木は、熱帶にしかない。そして熱帶地方の實際を知つた人でなくては其の有難さを充分に會得することが出來ない。恰かも印度人に向つて、巨燵の說明をするやうなもので、嘗て雪を見たことのない印度人は容易に巨燵の有難さを了解するものではない。

餘談はさて置き。アバラは疲れ果てたる時に、此の生命の親なる椰子樹を見付けたので、勇氣を勵まし、森を蒐けて一目散に馳り往き、手當り次第に椰子の實を食し こゝに漸く再生の思ひをした。

漸く饑渴の難を遁れたアバラは、再び悉達太子の住所について、いろ〳〵と心を苦しめて居る內に、飢ゑたる腹に食事を取つた故か、頻に睡りを催ふして來た。今睡つてはと幾度か心を引立てんとしたが、疲れたる身體は何時しか其場に倒れた。

悉達太子は、ダンドクセンに入つて、深き林を踏分け、修行者を尋ねて問答を試みんとした。此の林には、バカ仙人（バッカとも云ふ）といふ、バラモン敎徒の修行者が住み、已に永い間苦行して居たので有名であつた。

悉達太子は、先づ彼を尋ねて、彼若し勝らば之れに師事し、彼劣らば此の地を去つて他の修行者を訪ぬる考へであつた。彼は道なき所を進む內に、遙か向ふの樹木の枝に、猿の如くぶら下つて居るものがあつた。

猿かと思へば猿ではない、身には草本をまとふて居るが、確に人間に違ひないので或はこれが有名なるバカ仙人ではなからうかと思ひ、ツカ〳〵と其の傍に至り、

「某所にあらせられるはバカ仙人におはさずや」

「我を呼ぶものは何人なるや」

「我はカビラ城主の長子悉達である、汝に尋ねたきことあり、遙々此所まで訪ねて來た、願はくは我がために悟りの道を語られよ」

「汝はカピラ城の太子と云ふではないか」
「如何にも」
「太子の身分であつて、出家することは能ない、汝は我がバラモン教徒の信ずるヤドの法典を知らないか」
ヤドの法典は、當時印度に行はれたる、バラモン教徒によつて尊信せられ、世俗皆な之れに從ふ風があつた。其の中に、子孫を有するものは家を捨てゝ山林に入り、苦行の人となり道を修むることを得とある。
太子は、子孫を斷たないために此の法が設けられてあることを知つて居ながら、
「我は已に一子を擧げ得たり、出家修道に差閊へなき身である」
と無造作に答へた。
「汝は何故に出家修道せんとするのであるか」
「予が出家修道せんとするは、一朝一夕に起つた考へではない、あらゆる世上の苦を救

はんがためである」
「汝が救はんとする苦とは何か、我等自から世上にあらゆる苦を撰んで之れを行つて居るのである、汝若し道に入らんとすれば、此の苦行を積まねばならぬのである」
「我が世上の苦を救はんとするもの四種あり、老、苦、病、死の四苦を人類より除かんことを望むのである」
「老苦とは何か」
「我嘗て途に一老人を見る、髪白く、齒落ち、腰曲り、僅かに一幼童に導かれ杖に支へられて道に止まる、予は彼を見て人間の無常を感じた、人類の生命は長いやうでも短いものである、今日は已に昨日ではない、明日は固より今日でない、一分毎に總ての人が、アノ老苦に近よりつゝある、何故に人々は此の死を怖れないのか、怖れて之れを救ふ道を講じないのか怪しむべきことである、予は之れを救はんがために、家を捨て身に道を修めんとするものである」

「汝の云ふ所は宜し、次に病苦とは何か」
「予は或時病人の身痩せ衰へ、肉落ち骨出でゝ、顔色蒼白くして、自ら立つ能はざるを見て、世の中に病のために苦しまないものはない、我之れを救はんとの願ひを起した」
「汝のいふ死苦とは何か」
「一日死人あり、四人のもの棺をあげ香華をそなへ、幾多の家人は涙を流して之れを送るを見た。世の中に死滅の苦あり、人々必らず此の苦を免かれることができぬ、我之れを餘かんことを願ふものである」
「汝がいふ所の苦とは何か」
「人々樂を求めて得る所は苦である、人は何故に苦を免かれることができないか、我は此世を苦なき世界とせんとする大願を抱くものである」
「汝は苦を好まぬか、苦を好まざれば道を修めることはできぬ」

「予は世の人々の苦を救はんとするものである、此の苦を救ひ得れば、此の身を苦しむることは更に厭ふところではない」
「汝のごとき榮耀榮華に暮し來たものは、恐らく苦行を終ることはできまい」
「我、カピラ城の太子なるが故に、道を修むることができぬとは其の意を得ない、我が太子たりしは昨日の昔のことである、今は家もなく食もなき汝と同じ身分ではないか」
「よく申された、然らば問はん、我は斯く草木を身に纏ひ居るが、汝は身に綺羅を飾り居るではないか、衣服を飾りたい卑しい考が失せない内は、得て修業は望まれない」
悉達太子は、此の言葉を聞き、道理なることゝ思つたから、彼は惜氣もなく、身に飾りたる綺羅を脱すてゝ、木の葉を以て其の身にまとひ、
「身を飾らない位のことは、我等少しも苦とは思はない、斯のごとく衣服は已に脱去

りました」

「如何にも天晴である、我々修行者は、草根木實を拾つて、一日たゞ一食を取るばかりである、汝は之れを堪へ得るや」

「固より覺悟の上、聊か苦しみは思はない」

「然らば二日に一食となるも耐へ得るか」

「如何にも覺悟して居るところで、必らず耐へまする」

「三日に一食となるも、尙ほ耐へ得るや」

「三日に一食は愚か、五日に一食、十日に一食となるも、人の耐へ得る所は必らず耐へまする」

「汝は一脚をあげて、絶へず片脚にて歩行し得るか」

「いと易きこと」

「汝は汝を水の中に浸し、道を悟り得るまでは、其の頭を水から離すことは能ないが

何うぢや」

「如何にも其の通りに致すでござらう」

「然らば火の苦しみに耐へ得らるゝか、絶へず身を焦すごとき火の上に端座して少しも動くことは能ない」

「耐へまする」

「砂中に身を埋めて、虫のごとく苦しみ得るか」

「砂中に身を沒するは愚か、たとへ如何なる難行苦行も、美事耐へ得る覺悟でござる」

「汝の頭髮を一本づゝ拔取り得らるゝか」

「頭髮は、いと易きこと、道を修め得らるれば、手足を掻取られても苦しいとは思はない。が、おん身等の苦行は、果して道を覺り得られるか、否かを疑はずには居られない。おん身等は斯く苦行して何ものを望まれるのである、果して予が願ふごとき人